

やはり俺の彼女は可愛
すぎる。

Never Say Never

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Pixiv様でも連載しているシリーズです。

名前が変わっているのはこちらでは既にロードローラーさんがいるようなのでこの名前にさせていただきました

目次

第1章　　く総武高校1日体験入学編く

八幡「実は俺彼女いたんだ」―― 1

雪乃「比企谷君を問い詰める」

12

凜「総武高校1日体験入学！」

27

八幡・凜「私たちの始まりの日！」

43

凜「総武高校1日体験入学！」八幡「そ

の2」―― 59

ポーナストラック♪ その1

八幡「ヤンドリの恐怖」―― 67

第2章　　く修学旅行編く

修学旅行編　その1　―― 84

修学旅行編　その2　―― 100

修学旅行編　その3　―― 107

修学旅行編　その4　―― 115

♪ポーナストラック♪ その2

番外編　その2　職場体験　―― 122

第1章 〱総武高校1日体験入学編〱

八幡「実は俺彼女いたんだ」

唐突だが俺には彼女がいる。名前は渋谷凜つって今はアイドルやつてる。なんで俺が凜と付き合えたか不思議なレベル。だがそれを俺は妹にも隠している。つーか向こうが忙しすぎて会えてないんだが。妹にも奉仕部のあいづらにも隠し続けている。つーかメールだけでも嬉しいんだがそろそろ凜に会いたい。つってもあいつ東京に引越したから東京行かなきゃいけないんだがな。まああいつのためなら問題ない。

八幡「今日も、依頼はこなさそうだな。」

雪乃「そうね。でも依頼が来ないことは別にいいことよ。」

由比ヶ浜「そういえばヒッキーって携帯の連絡先とメールだけロックかけてるの?」

八幡「なんでそれを知ってるの?あなた私のストーカー?」

雪乃「誰の真似をしたかは聞かないけど、気持ちが悪いわ。やめて寒気がするわ。」

由比ヶ浜「本当ヒツキー似てないし……じゃなくて小町ちゃんが言ってたの！なんか中学生の途中からロックかけられて、見れなくなっただとか……」

八幡「小町ちゃん、あなたなに人の携帯勝手に見てるの？」

雪乃「比企谷君、そんないかがわしいことに携帯を使ってたなんて、早く警察に行きなさい」

八幡「ねえ。勝手に犯罪者扱いすんのやめてくんない？つーか別に意味はねえよ。」

由比ヶ浜「いやなんか、小町ちゃんが『お兄ちゃん、これじゃあお義姉ちゃん候補を
探せないよ！小町の的にポイント低いよ！』っていつてたよ！」

八幡「別にお義姉ちゃん候補はいいからさ……」

由比ヶ浜「ヒツキー。」

彼女いないよね？」

八幡（なぜ分かったんだガハマさん。なにこの子エスパーなの？）

八幡「な、なに言ってるんだよ。俺だぜ。い、いるわけないだろ。」

雪乃「由比ヶ浜さん、この男にそんな人いるわけないでしょ。と言いたいところだけど、今の反応からしているかもしれないわね。」

雪乃・由比ヶ浜 「比企谷君（ヒツキー）彼女いるの？いないよね？」

八幡（マズイ……………雪ノ下まで疑い始めたな）

八幡 「いやいや。だから俺d

フリカエラズマエムイテソシテタクサンノエガオヲアゲルゝ

3人 「……………」

由比ヶ浜 「ヒツキー。携帯こんな着信じやなかったよね。」

雪乃 「そうね。もっと普通の着信音だったわよね。」

八幡 「彼女がいたとしても、この着信音アイドルの歌だぜ？そんなの彼女の着信音にするわけないじゃん」

由比ヶ浜 「でもそのアイドルg

八幡 「いやいやあり得ねえから」

雪乃 「そうよ由比ヶ浜さんこの男がアイドルと知り合いなわけないじゃない。」

由比ヶ浜 「……………そうだよね。」

八幡（危ねえ。バレるところだった。つーかさっきの出なかつたから凜のやつ怒ってんだろーな。）

由比ヶ浜「でも、ヒツキーさっきの着信だれの？」

八幡「誰でもいいじゃん

フリカエラズマエラムイテソシテタクサンノエガオヲアゲル〜

八幡「で、電話だから出てくるな。」

八幡（よし、うまい口実が！でも凜怖そうだな。）

由比ヶ浜「ヒツキー！まっ t

side 由比ヶ浜 and 雪ノ下

由比ヶ浜「ヒツキー、怪しいよね。」

雪乃「由比ヶ浜さん。流星に比企谷君がアイドルと知り合いなわけないでしょう。」

由比ヶ浜「だよね。でもまだ気になるよ・・・」

雪乃「では、小町さんに比企谷君が土日以外に出たら連絡もらって、尾行してみましよう。」

由比ヶ浜「確かに！ゆきのんナイスアイディア！」

side 八幡

八幡「よう。さつきは周りに人がいて・・・」

凜『なに私より大事なの？』

八幡「いや、バレると大変だからな」

凜『冗談だよ。でも八幡に友達がいたの？』

八幡「渋谷さん酷くない？友達じゃねえよ。同じ部活なだけだよ」

凜『ふーん。それ女？』

八幡「そ、そうだけ。女子2人です。し、渋谷さん怖いよ」

凜『浮気、してないよね？』

八幡「するわけねえだろ。俺が愛してるのは凜だけだ」

凜『そ、そう。ありがと』

八幡「で、どうしたの？急に電話なんて？」

凜『実はプロデューサーに八幡のこと話したら、連れてきてって言われて』

八幡「言っちゃったの？」

凜『でも、そのプロデューサーはアイドルが恋するのは別に構わないからどんな人か

見ておきたいって』

八幡「わかった。じゃあいつ行けばいい？」

凜『今週の土曜日に346プロのシンデレラプロジェクトの部屋に来て』

八幡「わかった。土曜日な。久しぶりに会えるな、嬉しいよ。愛してるよ凜」

凜『そ、そんな歯の浮くようなセリフ言えるわね。嬉しいけど…わ、私もあ、愛して

る』

八幡「じゃあ、土曜日な。凜」

凜『うん。じゃあね』

土曜日

小町「あれ、お兄ちゃん、こんな朝っぱらからどこ行くの？」

八幡「いやな、ちよつと東京に用事が・・・」

小町「あのゴミいちゃんがかんな朝っぱらから!？」

八幡「小町ちゃん酷くない？それ。まあいいや。じゃあ小町行ってるな。」

小町「雪乃さん。うちのお兄ちゃんが東京に用事があると言つて出かけましたよ。」

雪乃「ありがとう、小町さん。すでに駅で待ち伏せしてるわ。」

小町「では、お兄ちゃんのことお願いします」

雪乃「ええ。あ、比企谷君が来たわ。じゃあ小町さん、切るわね。」

八幡（東京も久しぶりである。346プロだっけ？結構有名だが。あの雪ノ下が知ってるくらいだからな、凜もすごいもんだ。と、ここが346プロか。）

由比ヶ浜「ゆきのん。なんかヒッキービル入ってったよ。」

雪乃「ええ。かなりでかいビルね。比企谷君の知り合いっていったいどれなのかしら？」

由比ヶ浜「何の会社だろ？って、ここ346プロのビルじゃん!？」

雪乃「ますます怪しいわね。どんな知り合いかしら。」

由比ヶ浜「どうする？ゆきのん」

雪乃「流石にこれ以上は無理ね。でも月曜日、彼を問い詰めましょう。」

八幡「すみません。渋谷凜さんの知り合いで今日呼ばれてるんですが。」

受付の人「・・・失礼ながら、名前を聞かせてくださいますか？」

八幡「比企谷八幡です。」

受付の人「比企谷様ですね。ではこの札をお持ちください。」

八幡（シンデレラプロジェクトの部屋ってここか。）

コンコン

八幡「失礼します。」

凜「八幡。久しぶり！」

八幡「久しぶりだな。凜」

卯月「あなたが、凜ちゃんの彼氏さんですね。私は島村卯月です！よろしくお願います！」

八幡「よろしくお願います。いつもTV見てます。」

八幡（知らないわけないだろ。つかこんなところで会えるとはな。大スターじゃねーか。）

卯月「え、本当ですか？ありがとうございます!!」

八幡「凜。ねえなんで他の人もいるの？」

凜「え、ダメだった？ゴメンね？」ウルウル

卯月（凜ちゃんすごいデレデレ。）

八幡「べ、別に大丈夫だぞ。」

八幡（上目遣い＋涙目はダメだろ・・・）

未央「君がしぶりんの彼氏さんか。私は本田未央だよ。」

八幡「今この日本でお前ら知らない奴なんていないだろ。」

未央「そう言ってもらえるとすごい嬉しいよ!!ありがとう!」

武P「こんにちは、比企谷さんですね。」

八幡「ええ。こんにちは。」

武P「なるほど。いい目をしてますね。」

八幡「え?自分で言うのもなんだけど、俺の目ってしんできますよ?」

武P「いえ。比企谷さんの目は人のことをよく見れる目をしてます。」

八幡「そ、そうですか。」

武P「うちで働いて欲しいくらいですね。」

凜「うちで働きなよ!八幡。高校卒業したらでいいからさ、そしたらもつと一緒にいれるよ」

八幡「え、いいんですか。」

武P「私の上に聞いてみましょう。」

八幡「わかりました。とりあえず、親に相談してみます。」

凜「やった!八幡大好き!」

卯月「凜ちゃんがここまでデレデレになるなんて・・・」

武P 「話を戻しましょう。比企谷さんの人となりから見るに渋谷さんの彼氏として全く問題ないでしょう。これからも渋谷さんをよろしくお願いします。」

八幡 「は、はい。」

武P 「では、今日はお疲れ様でした。」

八幡 「失礼します。」

凛 「そうだ。八幡。」

八幡 「どうした？」

凛 「今度番組の収録でどこかの学校に1日体験入学するんだけど。プロデューサー別に八幡なら言っつていいよね？」

武P 「ええ。」

八幡 「ん？なに？どうしたの？」

凛 「その企画で八幡の学校に1日行くことになったからよろしくね？」

八幡 「マジかよ。クラスは？」

凛 「なんか生徒指導担当の平塚先生のクラスって言ってたよ？」

八幡 「マジかよ。俺のクラスじゃん。」

凛 「本当？やった！」

武P 「比企谷さんのクラスならもんだいなさそうですね。」

凜「そうだ。八幡の部活も見に行くからね。八幡がどんな人と部活してるのか気になるからね。」

八幡「お、おう、そうか。そうだ、学校じや名前呼び禁止だからな。」

凜「仕方ないけど、そうするよ。」

八幡「では、失礼します。」

武P「比企谷さん、今日はありがとうございました。」

凜「八幡また今度ね！」

雪乃「比企谷君を問い詰める」

八幡が346プロを訪れる数日前

sideシンデレラプロジェクト

卯月「凜ちゃん。」

凜「どうしたの、卯月」

卯月「最近何か悩んでませんか？」

凜「え、卯月なに言ってるの？」

卯月「見るからに大丈夫じゃないですよ。凜ちゃん倒れそうで。」

未央「そうだよ！なんかしぶりん最近大変そうだよ。」

凜「そうかな…」

卯月「そうですよ！プロデューサーさんもそう思いますよね？」

武P「ええ。渋谷さんは最近疲れているように見えます。我々に何かできることがあれば行ってください。」

凜「このままじゃダメかな？」

武P 「ええ。このままだとレッスンをやめさせていただくかもしれません。」

凜 「それは・・・」

武P 「私たちに話して下さい。渋谷さん。」

卯月 「そうですよ！凜ちゃん！」

凜 「わ、わかったよ。プロデューサー、誰にも聞かれない場所で話したいんだけど。」

武P 「わかりました。」

凜 「卯月たちも聞いてくれる？」

卯月 「もちろんです！」

凜 「実は私……………」

彼氏がいるんだ！

武P 「…………」

卯月 「…………」

未央 「…………」

武P 「渋谷さん。世間ではアイドルに恋愛は」

凜 「うん。わかってる。だからアイドルになってから会ってないよ。」

武P 「アイドルになってからということとは前からお付き合いしていたと。」

凜 「うん。」

武P 「そ、そうですか。まあ、アイドルになってから会ってないということはなんとかまだ大丈夫ですが、」

凜 「うん。だからアイドルになってから会ってないから、最近会いたくなっちゃって。」

武P 「ではその彼氏さんをここに呼んでくれませんか？私があります。」

凜 「プロデューサー、なに話すつもり？」

武P 「渋谷さん、落ち着いてください。どんな方か会うだけです。」

凜 「本当に？」

卯月 「そ、そうですよ！凜ちゃん！」

未央 「そうだよ、しぶりん！ほら、その彼氏さんにも会えるし！」

凜 「そ、そうか。そうだね。わかったよ、プロデューサー。でいつ呼べばいいの？」

武P 「今週の土曜日は渋谷さんたちニュージエネレーション以外はいませんから、その時に」

凜「わかった。」

卯月「凜ちゃんに彼氏さんかあ。」

未央「しぶりに彼氏・・・」

~~~~~

雪乃「小町さん今日は比企谷君がアイドル事務所の346プロまで入っていったところまでは確認したわ。」

小町「そうですね。あのゴミいちちゃんめ。小町に隠し事なんて小町的にポイント低い。」

雪乃「そこで小町さん、月曜日に部室で比企谷君を問い詰めようと思うんだけど。」

小町「わかりました！月曜日に部室に行けばいいんですね？」

雪乃「ええ。」

小町「ところで、雪乃さんはどうして、そこまでするんですか？」

雪乃「ど、どういうこと？小町さん。部活動の規律を守る」

小町「雪乃さん、本当のこと、教えてください。そんな理由でお兄ちゃんを問い詰めるなんて小町がとめますよ。小町のお義姉ちゃんがいるかもしれないから。」

雪乃「・・・」

小町「雪乃さん、お兄ちゃんのこと、どう思ってるんですか？」

雪乃「わかったわ、小町さん。私は比企谷君が好きよ。だから気になるの。」

小町「それが聞けて嬉しいです。では、月曜日ですね、雪乃さん。」

月曜日 奉仕部

八幡「うーす」

雪乃「あら比企谷君、挨拶もまともにできないのかしら？」

八幡「いや、お前もしたないじゃん。」

雪乃「人間でないあなたにする必要があるかしら？」

八幡「流石にそれ酷くない？八幡泣いちゃうよ？」

雪乃「冗談よ。こんにちは、比企谷君。」

八幡「こんにちは、雪ノ下。」

由比ヶ浜「ヒツキーとゆきのんやつはろー」

雪乃「こんにちは、由比ヶ浜さん。」

八幡「おう。」

由比ヶ浜「ゆきののん、小町ちゃんまだ？」

雪乃「ええ。まだみたいね。」

八幡「なに？小町が来るのか？小町なんで俺に教えてくれなかったんだ？なんでなんだ！」

雪乃「比企谷君うるさいわよ。黙りなさい。」

由比ヶ浜「そうだよ！ヒツキー。」

八幡「酷い……」

ガラッ

小町「雪乃さん、結衣さん、こんにちは。」

由比ヶ浜「小町ちゃん、やつはろー」

雪乃「小町さん、こんにちは。」

八幡「小町、なんで俺に教えてくれなかったんだ？」

小町「うるさい、ゴミいちゃん。」

八幡「酷い……」

雪乃「小町さん、鍵閉めてもらえるかしら？」

小町「わかりました！」

ガチャッ！

八幡「え？なんで鍵を？」

雪乃「さて、比企谷君。あなた土曜日どこに行ってたのかしら？」

八幡「いや知り合いの家n

雪乃「あなたに知り合いがいるのかしら。」

八幡「……別にどこだっでもいいだろ。」

雪乃「あなた、アイドル事務所に行っただけでしょ？」

八幡「は？なんでそれをつてしまった！」

雪乃「あら、本当に行ってたのね。」

八幡「こんな簡単な、由比ヶ浜でもひっつかからないような罠にひっつかかるなんて……

別に

由比ヶ浜「ヒツキーばかにすんなし！」

雪乃「で、比企谷君アイドル事務所になんの用事で行ってたの？」

由比ヶ浜「そういうえば、ヒツキー携帯の着信音アイドルの歌に変えてたよね。」

八幡（ま、まずい。誰か助けて。）

八幡「い、いや。別に大したことt

フリカエラズマエユミテソシテタクサンノエガオヲアゲル♪

八幡「……」

雪乃「……」

由比ヶ浜「……」

小町「……」

八幡「電話だから外にでt

雪乃「その電話私が出るわ。」

八幡「え、なんd

雪乃「由比ヶ浜さん！」

由比ヶ浜「ゆきのん、わかった！」

八幡「おい、由比ヶ浜、返せよ」

雪乃「由比ヶ浜さんスピーカーにして！」

由比ヶ浜「うん！よし！通話ボタン押すよ！」

八幡（くそ！電話かかってきた状態じゃもちろんロックがされねえ！）

ポチツ

凜『もしもし、八幡？』

八幡（しまった）

雪乃「あなたは誰かしら」

凜『そういうあんたは？私八幡の携帯に電話したんだけど。八幡に変わってよ』

雪乃「私は比企谷君の部活が同じ雪ノ下雪乃よ」

凜『ふうん。あんたが』

八幡「おい！後で折り返すから今は電話切れ！」

凜『はあ。しかないな。じゃあね。八幡』

ブチッ

八幡（危ねえ）

雪乃「さて、比企谷君あの子は誰だったのかしら？」

小町「でも、どっかで聞いたような。」

由比ヶ浜「大丈夫！私、録音したよ！」

雪乃「ナイスだわ！由比ヶ浜さん!!」

小町「結衣さん、ナイスです！」

八幡「なに!?由比ヶ浜のくせに頭の回ることしやがって」

由比ヶ浜「ヒツキーうるさい！マジキモい！」

雪乃「とりあえず、由比ヶ浜さんもう一度聴きましょう」

小町「なんかこの人以外の声聞こえませんか？」

由比ヶ浜「確かに」



『ロツクダネ〜。シマムーシブリンガ〜。ミオチャンシズカニシナイトダメデスヨ!』

雪乃「確かにどこかで聞いたような」

八幡（まづい!でも、今のうちに。）ソロー

八幡「俺今日帰るな!じゃあな!」

雪乃「あ!比企谷君待ちなさい!」

八幡「待つかったの!」

八幡「もしもし?さっきは悪かったな。」

凜『別に大丈夫。ばれなかった?』

八幡「ギリギリ逃げてきた。つーか後ろの声拾われてたぞ。」

凜『え?本当。ゴメンね』

八幡「別に大丈夫だよ。で、どうしたんだ?」

凜『あ、急なんだけどさ、明日八幡の高校に1日体験入学するから。よろしくね』

八幡「明日!?!急すぎるだろ。」

凜『今日はそれだけ。カメラ入るのは朝と1時間目だけらしいから、1時間目終わったら普通に受けていいってさ』

八幡「そ、そうか。」

凜『もちろん部活も行くからね』

八幡「はあ。わかったよ。また明日な。」

凜『うん。またね』

八幡（とりあえず明日はなんとかなるか。）

由比ヶ浜「わかった！346プロのアイドルだよ！」

小町「・・・本当です！よく気づきましたね！」

雪乃「でも、なんで346プロのアイドルと比企谷君が・・・でもこれ以上比企谷君は口を割らなそうだし。」

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

八幡が帰った後の奉仕部

しばらくして

雪乃「少しやりすぎたわね」

由比ヶ浜「うん。ヒツキーとアイドルの関係気になって調子乗っちゃったね」

小町「はい。やりすぎましたね」

雪由小「二はぁ。比企谷君（ヒツキー）（お兄ちゃん）怒ってるわよね（よね）（そうだなあ）」

雪乃「明日謝りましょう」

由比ヶ浜「そうだね」

小町「はい。小町は明日も来ます」  
ガラッ

平塚「やあ。やってるか。と、比企谷はいないのか」

雪乃「平塚先生、ノックをお願いします。あと、彼は、今日は帰りました」

平塚「君は比企谷の妹か」

小町「あ、平塚先生こんにちは」

由比ヶ浜「平塚先生、どうしたんですか」

平塚「ああ。生徒には秘密なんだが、明日アイドルがうちの高校に1日体験入学するので、比企谷に世話係を頼もうかと。あいつなら必要以上話さないから、迷惑かけそうにないからな」

小町「え!?! 本当ですか?」

由比ヶ浜「誰が来るんですか?」

平塚「えつと、346プロの渋谷凛だよ。」

雪由小「!?!」

雪乃「渋谷さんは部活も来るんですか?」

平塚「いや、渋谷さんの意思によるな」

雪乃「そうですか。わかりました」

平塚「?では私は比企谷に連絡するんな。じゃあな」

雪乃「今日はここまでにしましょうか」

由比ヶ浜「うん。そうだね」

小町「わかりました。さようなら」

八幡（ん、平塚先生からメール？『緊急なのでメール見たら、電話ください。』か。今回マジみたいだな。）

八幡「もしもし。平塚先生ですか？」

平塚『やあ。はやかったな』

八幡「どうしました？」

八幡（なんか嫌な予感が・・・）

平塚『ああ。明日346プロの渋谷凪がうちの高校の私のクラスに1日体験入学するんだ』

八幡（やつぱり）

八幡「はあ」

平塚『そこで、君に彼女の世話係を頼もうかと思ってな』

八幡「なんで、俺なんですか？由比ヶ浜にでもたのめばいいのに」

平塚『由比ヶ浜に任せると彼女のグループに

渋谷さんが質問攻めにされるのは目に見えてるだろう。それに今君の席の隣は誰もいないだろう』

八幡「はあ。俺に拒否権は……………」

平塚『あると思ってるのか？』

八幡（俺が1日演技するのか。持ちそうもないが、仕方ないか。）  
八幡「わかりました。」

## 凜「総武高校1日体験入学！」

総武高校 21F

平塚「えー、今日はだな、突然なんだがテレビのカメラが入る。それにともなってゲストとしてアイドルの渋谷凜さんが1日体験入学する。渋谷さん入ってきてくれ」

凜「こんにちは。346プロの渋谷凜です。今日は1日よろしくお願いします」  
ニ  
コッ

戸部「やばいっしょー！本物っしょー」

モブ「それアグリーー！」

モブ「それな」

平塚「それで、今日は比企谷に渋谷凜さんの世話係を頼む」

八幡「わかりました。」ハア

八幡（1日演技か・・・）

モブ「ニなんでヒキタニなんですか!?あいつあれじゃないですか!」

凜（あれ?あれってなにかなあ?八幡?）

八幡（凜が、凜が怖いよお。八幡怖くて耐えられない）

平塚「彼は私の部活の生徒だからな。」

モブ「二でもあいつ文化祭で！」

葉山「まあまあ、俺も彼があんなことはしないと信じてるよ。彼だつて根はいいやつなんだ。信じてあげようよ」

モブ「葉山君がそう言うなら……」

モブ「しかないかな」

モブ「でも渋谷さん！気をつけてね！」

凛イラッ

凛（ふーん。八幡そんなことしてたんだ。文化祭……ね。にしても、あの葉山つてやつも薄っぺらいね。本当はひどい性格してるんだろなあ）

凛「うん。ありがとう！気をつけるよ」ニコッ

八幡（あれはキレてる目だ……怖い……）

凛「よろしくね、はちま 比企谷君」ニコッ

八幡「よろしくお願いします」

八幡（なんか、文化祭でどんなことしたのつて怒ってる笑い方だ。こえーよ。つか、一瞬名前で呼ぼうとしたよな……）

平塚「では、授業を始める」



モブ「あ、あのサインください！」

モブ「れ、連絡先を」

八幡（いきなり連絡先ってなんだよ……せめてサインくらいにしてやれよ）  
平塚「比企谷、今日移動教室で移動するところだけは案内してやってくれ。」

八幡「うす」

凜「みんな、ごめんなさい。あとでまた、ね」ニコツ

凜「はちま 比企谷君お願いします。」

八幡（また間違えてんじゃない）

凜ニコツ

八幡（黙って、案内してって目してるよ。こえーよ。）

八幡「じゃ、いきますか。」

くくくくくくくくくく

八幡「ねえ渋谷さん何回名前で呼んでんの？」

凜「いいじゃん。癖で名前で呼んじゃうんだもん」ツーン

八幡「名前で呼ばれて痛い目見るの俺なんだけど……」

凜「ダメ？」ウルウル

八幡「べ、別に構わないが……」

凜「じゃあ名前で呼んでね！」

八幡「は？」

凜「いいじゃん。私が名前で呼んで？つて頼んだつて言つたつてなればいいんだから  
さ」

八幡「はあ。わかった」

凜「ねえ、クラスの人たちが言つてた、文化祭のことつてどうゆうことかな？」ニコツ

八幡「いや、ねえ、そんなことより早く回ろうぜ」

凜「どうゆうこと？」ニコツ

八幡「いや、だから早く」

凜「どうゆうこと？」ニコツ

八幡「すみません。全部話すのでその笑い顔やめてください。怖すぎます。」

凜「最初から話せばいいんだよ？」

八幡説明中

凜「ふーん。まあやつぱり八幡つてどこかな。まあそこがかっこいいんだけど」

八幡「そんな恥ずかしいこと言うなよ・・・」

凜「嫌、だった？」ウルウル

八幡「いや嬉しかったけどさ……………」

八幡（俺凜に弱すぎ？まあ凜が可愛いのがいけない。だから、僕は悪くない）

凜「よかった！」

八幡「じ、じゃそろそろ戻るか」

昼

モブ「渋谷さん、さっきあいつに変なことされなかった？」

凜「あいつつて、八幡のこと？普通に優しかったよ」

モブ「？八幡？」

由比ヶ浜「え、渋谷さんヒツキーのこと名前で呼んでる？」

凜「さつき、案内してもらった時、名前教えてもらったんだ。」

由比ヶ浜「私もまだ名前で呼んだことないのに」

モブ「でもあいつ、うちに酷いこと言ってきたクズだから気をつけないと」

凜イラアツ（あんたがいけないでしょ）

由比ヶ浜「でも、ヒツキーリスクとリターンの計算はとんでもないから大丈夫だと思

うけど」

凛「説明も丁寧で優しかったよ」ニコッ

モブ「えー、信じられない。でも、そうやって油断させておいて何かしてくるかもしれないから、気をつけて？うちも何かあったら協力するから。」

凛（あんたが悪いんだろ）イラ

凛「うん。ありがとう。」ニコッ

八幡（顔みると凛のやつ怒ってるな・・・あいつ怒るとほんとこえーよ。

雪ノ下さんの怖さを凌駕するぞ………そこが可愛いんだけどね。相模がはなしてるから、余計イライラするののか）

戸塚「あ！八幡！」

八幡「どうした？」

戸塚「渋谷さん可愛いなあって」

八幡「まあ凛アイドルだからな。サインでも欲しいのか？」

戸塚「え？」

八幡「どうした？」

戸塚「いや八幡が渋谷さんのこと名前で呼んでたから」

八幡「名前で呼んでくれって頼まれたからな」

戸塚「なら八幡も僕のこと名前で呼んでよ」ウルウル

八幡（グハツ！戸塚！可愛すぎる！凜がいなきや告白してけっこんしてるまであるぞ  
！）

八幡「お、おう。わかったぞ、さ、彩加」

戸塚「ありがとう！」ニコ

八幡（本当なんて男なんだろ）ドキ

凜（・・・・・・・・・・）

八幡　ゾクツ

八幡（しまった！凜が怒ったよ！怖いよやめてよお）

戸塚「八幡、大丈夫？顔色悪いよ？」

八幡「彩加。大丈夫だ」

戸塚「あ！あとサインもらえないかなあ」

八幡「わかったあとで聞いてみるわ」

放課後

モブ「渋谷さん今日私の部活来ない？」

モブ「ずるいぞ！渋谷さん、是非俺の部活に！」

凜「ごめんね？今日平塚先生が顧問してる部活に行くことになってるんだ。」

モブ「ってことは、またヒキタニかよ。」

モブ「あいつ変なことするんじゃないよな。」

モブ「大丈夫か？」

由比ヶ浜「み、みんなヒツキーなら大丈夫！そんなことしないよ！」

モブ「そつか。由比ヶ浜さんがそこまで言うなら大丈夫か。」

モブ「おい。入り口に不審者みたいな大人がいるぞ。」

モブ「ほんとだ。大丈夫か？」

凜（誰だろ？ってプロデューサーじゃん。）

凜「どうしたの？プロデューサー」

武P「いえ。授業が終わったそうなので、迎えに来ました。」

凜「大丈夫だよ。部活行くなら八幡いるし。」

武P「いえ、あと職員室で待機してると平塚先生が話しかけてこられて、怖くて……」

凜（プロデューサーが怖がるって……）

八幡（平塚先生え）

凧「じゃあプロデューサーも部室までとりあえず行こうよ。確認したいこともあるし。」チラッ

八幡（そろそろ部室行こうって目してるよ。）

八幡「わかりました。そろそろ行きましようか。」

由比ヶ浜（今日は仕方ないか。一緒に行きたかったけど）

凧「みなさん。今日は1日お世話になりました！ありがとうございます！お先に失礼します！」ニコッ

モブ「ニコ、ありがとうございます！お疲れ様でした」「」

武P「で、渋谷さんが確認したいこととは？」

凧「私たちのことなんだけど、八幡、その部活の人たちって八幡にとって信用できる？」

八幡「俺たちのことあいつらに話すのか？」

凧「八幡が信用できる人たちなら。」

八幡「その点では、大丈夫だと思う。」

武P「では、確認したいことは」

凧「うん。私たちのことその人たちに話そうと思って」

八幡「どうしたんだ？急に」

凛「女の勘？で話した方がいいかなって。」

八幡「お前がやりたい人なら話せばいい。」

凛「うん。わかった。ありがと」

八幡「おう」

凛「あとさ、あの戸塚って人は誰？」ゴゴゴゴゴゴ

武P（渋谷さんからオーラが!?怖い！）

八幡「凛！お、落ち着け！」

凛「なら早く説明して？」ニコ

八幡「戸塚は男なんだよ！」

凛「え？本当？」

武P（渋谷さんからオーラが消えた。よかった。たすかった）

八幡「俺も信じられないが………」

凛「よかった。浮気してるのかと思った」

八幡「それはない。俺が愛してるのは凛だけだ」

凛「ふふ。よかった」ギユ

武P（甘い。一瞬でこの空間が甘くなった………）



ガラッ

八幡「うーす。」

雪乃「こんにちはは、やる気なし谷君。相変わらず、やる気のない挨拶ね。」  
八幡「なんでも谷つければいいってもんじゃねえだろ」

凜「こんにちは。今日はよろしくお願いします」

凜（なかなか可愛いな。ん、この感じやっぱりこの子も八幡のこと）

雪乃「あなたが渋谷凜さんね。こんにちは。」

武P「こんにちは。渋谷さんのプロデューサーをしています。武内です。」

雪乃「こんにちは」

由比ヶ浜「やつはろー、ゆきのんヒツキーしぶりん！」

雪乃「こんにちはは由比ヶ浜さん。」

凜「こんにちは。」

（つてしぶりんつて未央と同じネーミングセンス・・・）

八幡「おう。」

凛（この子はクラスの時点でわかってたけど、やっぱり八幡のこと）

凛「八幡、ちよつとプロデューサーと外出ててくれない？この2人と話すことあるから。」

八幡「待て。話すんなら、あと俺の妹も来るは？」

小町「こんにちはーって本物の渋谷凛だ！」

雪乃「こんにちは」

由比ヶ浜「やつはろー、小町ちゃん」

凛「こんにちは」

凛（この子は八幡の妹かな？）

武P「こんにちは」

八幡「じゃあ俺は武内さんと外出てるな。」

凛「うん。ありがと。」  
ガラッ

雪乃「あの、渋谷さんは比企谷君と何か関係が？」

由比ヶ浜「うん。」

凛「その前に確認したいんだけど、八幡からメールで聞いたらストーカーとかして

るって本当？ 本当なら理由を教えて欲しいんだけど。 まあ八幡は気づいてないみたい  
なんだけど。」

雪乃「……ええ。それで、比企谷君が346プロのビルに入っていくところとか。」

凜「なんで、そんなことしたの？」

雪乃「そ、それは」

小町「雪乃さん。正直に話してください。」

雪乃「……ええ。私は比企谷君が好き。だから誰か付き合ってる人がいるかも  
と思ったら、いてもたってもいられなくて……」

由比ヶ浜「わ、私もヒツキーのこと好きで気になっちゃって。」

凜（やっぱりね。）

小町「それで渋谷さんとお兄ちゃんの関係は？」

凜「うん。私と八幡は付き合ってる。」

雪乃「……なぜ、それを私たちに？」

凜「八幡がね。あいつらなら信用できるって言ってたの。でも、私はストーカーとか  
してたとか聞いたらとても不安だから、このままなら八幡にこの部活をやめて欲しい。」

雪乃「やめて！私たちと比企谷君を引き離さないで！彼が初めて私という存在を認めてくれた人なの。だから彼がいなくなったら、私は・・・」

由比ヶ浜「私も・・・私もヒッキーのこと大好き。だから一緒にいたい！」

凛「だから、八幡と話し合って欲しいんだ。そういうことも込めて。もちろん今までやってきたことも謝ってね。それで八幡が許したならいい。」

雪乃「そ、そう。こんなことまでしてこれで許してもらえるなんて本当に申し訳ないわね」

由比ヶ浜「う、うん。わかったよしぶりん。ありがとう」

小町「わかりました。このままだったら私もお兄ちゃんやんの妹である資格はないですからね。」

凛「それを聞いて安心しました！そうだ、連絡先交換しませんか？」

雪乃「ええ。もちろんよ。」

由比ヶ浜「いいの？やったー。」

小町「ありがとうございます！」

雪乃「と、ところで、その、渋谷さん比企谷君とはいつからその」

由比ヶ浜「うん。付き合ってたの？」

小町「小町も知りたいです。」

凜「それはね・・・」

八幡「あいつら何話すんですかね。」

武P「私には女性の考えることはあまり・・・」

八幡「俺も凜以外のことは・・・」

武P「ところで、比企谷さん。あのプロデューサーの件なんですけど、本当にいいんでしょうか？」

八幡「ええ。凜と少しでも多く一緒にいれるならいいですよ。でも、一応大学は出たきたいなとおもってるんですが。」

武P「それでは大学在学中から、事務所で少しづつお手伝いして頂けませんか？その方がすんなりプロデューサー業に入れますし。もちろんその時間にあつたお給料は出ます。」

八幡「なるほど。それはいいですね。是非やりたいです。」

武P「でしたら、詳しい話をするために連絡先を」

八幡「わかりました。」

武P「そういえば、聞きたいことがあったのですが。」

八幡「はい。なんですか？」

武P「実は渋谷さん以外のシンデレラプロジェクトのアイドルに比企谷さんと渋谷さんの出会いを聞いてこいとしつこく言われまして。」

八幡「今話さないと・・・」

武P「後日彼女たちから直接聞かれると思います。」

八幡「ですよ。俺と凛があつたのは・・・」

## 八幡・凜 「私たちの始まりの日！」

3, 4年前

side 凜

この前また男子に告白された。

あの人たちは私の何を知ってるの？よくあれで告白しようと思えるよ・・・

女子も女子でくだらないことしか考えてないし・・・

なんで中身を知らないのに告白なんかできるのか知りたい・・・

はあ。誰か私渋谷凜を見てくれる人いないかなあ？

凜 「つてハナコ！」

いま私は飼い犬のハナコの散歩に来てるのだが、このハナコ人にほとんどなつかない。

私の家族にしか懐いてないんじゃないかな。

そしてそのハナコが急に走り出して：誰かにぶつかつた？

??? 「つわ、なんだって犬か・・・飼い主どこ行つたんだ？」

凜 「ごめんなさい！その犬私のです！」

??? 「そうかあんたの犬か。ま、気をつけてな。それじゃさよなら」

私の家族以外にハナコが懐いたとこ初めて見たよ

年は私と同じくらいかな。

ちよつと目が怖かったな。

でも、あの人のあの目は今まであつてきた人とは違って、なにか物事の本質を見抜くような目をしてたんだけどな。あの人となら仲良くなれたかも。

N e x t   D a y

s i d e   凜

また、昨日の人と会えないかな？と、思いながら散歩してると

凜「あ!!」

昨日のひとだ。どうしよう声かけようかな。それとも、このまま散歩に誘うか……よし、散歩に誘おう!!

凜「あの、すみません」

??? 「はい？」



凜「昨日うちの犬が、体当たりしてすみませんでした。」

??? 「ああ、昨日の・・全然大丈夫ですよ。」

凜「ここで会ったのも何かの縁ですしこのまま一緒に散歩しませんか？」

??? 「いや、でも悪くないですか？」

凜「いや、大丈夫です。この子も嬉しそうだし」

ハナコ「わんわん!!」

??? 「わ、わかりました。」

凜「私は、渋谷凜、中学2年だよ。」

??? 「比企谷八幡。俺も中学2年です。」

凜「同い年だし敬語やめようか。」

八幡「いや、でも初対面だし。」

凜「ダメ？」

八幡「わかりま、わかった」

凜「よろしく八幡。あ、八幡も名前で呼んでね。」ニッコツ

八幡「お、おう。わかった。よろしく、り、凜」

凜「連絡先交換しようよ。八幡とならなにか気が合う気がするんだ。いいよね？」ニ

ッコツ

八幡「いやでも、それはさすがに」

凜「ダメ？」ウルウル

八幡「わ、わかった。じゃあこれに打ち込んで」

凜「え、私が打ち込むの……はい、これからも遊ぼうね？」

八幡「……わかった。」

私と八幡の関係、まあ私の八幡に対する感情が変わっただけだけど、私と八幡の関係が変化したのはあの日。

side 凜

今日はこれから、八幡と遊ぶために、駅前で待ち合わせしてるんだけど

モブ「お嬢ちゃん、今から俺たちと遊ばない？」

凜「いや、今待ち合わせしてるから」

一時間も早く着いちゃった。そのせいで、まためんどくさいのに絡まれてる。

モブ「いいじゃん、カラオケとか行こうぜ。」

モブ「てか、まだ来てないんだろ。いいじゃんかよ。」ガシツ

てか、無理やりつかんできたよ。

凜「もうやめて!!」ドンッ

無理やりつかんできたから反射的に手を出してしまった。

モブ「おい！女だからって調子乗んな!!」バシンッ

痛ッ!!h、はたかれた!!ま、まずいこのままじゃ、誰か助けて・・・!!!

そんなことを思ったら急に目の前に誰かが来てくれた。

凜「八幡…?」

八幡「お前ら俺の凜になんしてくれてんの？」

side 八幡

あ、まずい。凜がナンパされてるよ。つか、あいつ早く来すぎだろ。俺もだけど。

てか、どうしよ。土下座でもするか。

それとも、凜には悪いが彼氏の振りするか。どうしよ

オイ、アイツイマナニシタ？リンノコトナグツタノカ？

そう認識した瞬間からだが勝手に反応していた。

やったことは覚えてるけど体が勝手に動く。

八幡「お前ら俺の凜になんしてくれてんの？」

モブ「はあ？おまえなんだよ」ゴフツ

とりあえず、凜に触れていた奴らをはがし、リーダー格の男を気絶させるまでタコ殴りにしていたにした。

モブ「てめえ、ふざけんな！」

うるさい。先に手を出したのはお前らだ。しかも凜に……  
だからお前らが悪いんだ。

気づいたら、あいつ等のほとんどを再起不能にしていた。

八幡「おい」

モブ「ひ、ひっ」

八幡「こいつら連れて、さっさと消えろ」

モブ「わ、わかった」

あいつらが消えるところを確認したら、急に疲れがきて、目の前が真っ暗になった。

side 凜

あいつらに、捕まった時、もうだめだと思った。でも、来てくれた。助けに来てくれ

た。

凜「は、八幡」

八幡「お前ら俺の凜になんしてくれてんの？」

俺の凜

そう聞いた瞬間体の底が熱くなるのが分かった。

八幡は結局あいつらのほとんどをボコボコにってしまった。かつこよかった。見惚れてしまった。

凜「あ、八幡!!」

よかった。寝てるだけみたい。どうしよう。仕方ない私の家に行くか。タクシー使って

でも、八幡が私の家に……

いきなりすぎたかな？

でも、そう考えただけで嬉しかった。

私の家の私の部屋に八幡を運ぶことに成功した。

今は膝枕をしている。最初恥ずかしかったけどあいつらのせいでデートチャラに

なったんだからこれくらいしても問題ないよね！

普通の時もかっこいいけど、寝てるときの八幡はなんか可愛い。

そんなことを思いながら膝枕していると気づいたら八幡の頭をなでていた。

その時やっと気づいた。さっき助けてもらった時に芽生えていたこの感情に。私は

八幡に恋してるのだと。

俺の凜と言われたときともうれしかった。八幡のすべてがいとoshii。

そうして、八幡の顔を見てみると、無意識にキスをしてしまった。

キスをした瞬間に、体に電流が走ったような感じがしてしまった。

そして、軽いキスだけでは満足できなくなつて、もう一回した。今度は舌も入れて八幡を味わうように。

凜「大胆………すぎるかな？」

そんなことを何回か繰り返していると、そのまま寝てしまった。

side 八幡

ん、ここはどこだ。つておいしいおいしい!!なんで凜に膝枕されてんの??つーか凜寝てるし。

起こすのも悪いし、このまま寝かせとくか。つーかここどこだ?

なにがあつたんだっけ?えーと。あ。俺とんでもないこと言つてた?

やばい死にたいよお。うん。キモいな

凜「ん、」

凜が起きたみたいだ。

凜「は、八幡!?お、起きてたの?」

八幡「お、おう。さつきな」

凜「起こしてくれればよかったのに」

八幡「いや気持ちよさそうに、寝てたからさ」

凜「そ、そう。あ、あと駅の時があった。」

八幡「いや、俺が行くのが遅かったのが悪いんだしさ」

凜「いや、私が行くのが早すぎただけだし。それ関係なくても嬉しかったし」ニコツ

八幡「お、おう」

今の笑顔はやばいだろ。反則だろ。可愛すぎる

八幡「・・・・・・・・・・」

凜「・・・・・・・・・・」

八幡「時間だし今日はもう帰るわ」

凛「う、うん。明日もう一回デー、お出かけしない？」

八幡「わかった」

俺はわかってしまった。

なんだろうな。

いつから芽生えていた感情なのだろうか。

俺は渋谷凛という女の子に恋をしていると。そう分かった瞬間体が熱くなり逃げように帰った。

side 凛

あの日から何回もデートをしているともう感情が抑えきれなくなってしまった。もう限界。だから私は今日八幡に告白する。

今日も洋服を見たり、映画に行ったり、いつも行く場所に行つてたけどなぜか今日は緊張する。

そして、今日のデートも終わりに近づいてきた。

凛「ねえ八幡。今日さ話したいことがあるから、静かなところにいこ？」

八幡「わかった、俺も話したいことがある」

そうして私たちはある丘の上まで上がってきた。



凜「きれいなところだね。」

八幡「そうだな」

凜「・・・・・・・・」

八幡「・・・・・・・・」

八幡「凜、話したいことって？」

凜「うん。」

私ね。よく告白されるんだけど、その男子たちが外見だけで告白してくるのがむかつかいてたんだ。

なんで内面を知らないのに告白できるのかがよくわかんなかった。でもね、八幡は違った。私の内面を見てくれてるって思った。私、渋谷凜を見てくれてるって思った。嬉しかった。初めて会った時からこの人なら、私をわかってくれるかもって思った。私がナンパされたとき、体張ってまで助けてくれたでしょ？あの時に気づいたんだ。

私、渋谷凜は比企谷八幡さんのことが大好きです。私と付き合ってください!!」  
少し沈黙。

ダメかな？

ふと八幡の方を見ると八幡は泣いていた。顔を赤くしながら

八幡「俺、ひねくれてて学校で友達いないんだよ。でも、俺はそれでいいと思ってた。

どうせ、内面を知ろうとしないんだって。でも、凜は違った。凜は俺の内面を知ろうとしてくれた。俺は凜の内面を知ろうとした。凜をナンパから助けたとき、あいづらが凜を殴ったとき初めて俺の中の何か切れたんだ。凜に恋してるって気付いたのはもう少し後だけだな。初めてだった。俺、比企谷八幡は、この子渋谷凜を助けなきゃって。俺もあの時気づいたんだ。凜となら、俺の探している『本物』になれるかもって。『本物』ってというのがどんなものかわからないけど、凜とそれがどんなものか探したいんだ。

俺、比企谷八幡も渋谷凜さんのことが大好きです。愛しています。こちらこそ俺と付き合ってください!!」

凜「本当に？私でいいの？」

八幡「ああ。凜じゃないとダメだ」

凜「私もう離さないよ」

八幡「そんな凜も大好きだ」

凜「ありがとう」

凜「両思いだったんだね。しかも、同じときから。嬉しいよ」

八幡「俺も嬉しいよ。大好きだ、凜」

凜「ねえ、八幡ぎゅってして？」

八幡「わかった」

時が止まったようだった。離れたくなかった。それとは別に八幡からしてほしいこともあった。

凜「八幡、あのナンパの後私の家で寝てる八幡にキスしちゃったんだ。ごめんね？」

八幡「マジで？でもそんなこと大丈夫だ。気にすんなよ。」

凜「じゃあ、お願いがあるんだけど」

八幡「なんだ？」

凜「八幡からキスしてよ」

八幡「え？」

凜「ダメかな？」ウルウル

八幡「大丈夫だ。俺もしたい」

チュツ

凜「もつと。もつと。もつとして？」

八幡「お安い御用だよ」

凜「ありがとうね？八幡」

八幡「こつちこそな」

凛「八幡は高校どこ行くの？」

八幡「総武高校に行こうと思ってる」

凛「じゃあ、私も行くから一緒に勉強しようね？」

八幡「わかった」

中学3年夏

凛「あのね、八幡。私東京に引越すことになっちゃったの」

八幡「え……まじかよ」

凛「私が東京に行っても、私の彼氏でいてくれる？」

八幡「あたりまえだろ」

凛「八幡、ほんとにごめんね？」

八幡「大丈夫だからもう泣くなって。」

凛「ありがとう」

チュツ

八幡「!？」

凛「ふふ」

八幡「凜にはかなわないな。じゃあな凜。愛してる」  
凜「うん。私も愛してる」

### 高校1年春

#### 凜の家

八幡「どうした？家にまで呼んで？」

凜「あのね、アイドルにスカウトされたんだ。昨日」

八幡「おう。すげーじゃねーか。で、やるの？」

凜「やつてもいいかな？」

八幡「凜がやりたいんならやつてもいいと思うぞ。凜に任せる」

凜「でも、アイドルって恋愛って駄目そうじゃん。だから……」

八幡「俺は凜が凜のやりたいことできなくなるのが嫌なんだ。俺はお前の声が聞ければそれでいい」

凜「そ、そう？」

八幡「おう。彼女のやりたいことやらせないのは彼氏のすることじゃないからな」

凜「ありがとう。わかった。私できるとこまでやってみるよ。だからさ、今日うちに泊まっていけない？最後だし。うち今日家に誰もいないんだ。だから、私の初めても

らつてくれると嬉しい・・・」

八幡「い、いいのか」

凛「当たり前じゃん。八幡にしかこんなこと言わないんだからね？浮気しないでね？」

八幡「するわけないだろ、浮気なんて。お前こそすんなよ？」

凛「それこそ当たり前じゃん。じゃあキスからして？」

チュッ

## 凜 「総武高校1日体験入学！」 八幡 「その2」

side 女子

凜 「まあ、こんな感じかな」

雪乃 (勝てる気がしないわ)

由比ヶ浜 (うー、しぶりん強すぎるよ)

小町 (お兄ちゃんがここまでできてたなんて・・・)

由比ヶ浜 「ま、まだ諦めないよ!!ね? ゆきのん?」

雪乃 「そ、そうね! まだまだこれからよ!」

凜 「で、2人はこれからどうするの?」

雪乃 「これまでのことを謝って、告白するわ。叶わない恋だと思うけど比企谷君なら、向き合ってくれる。そう思うの。」

由比ヶ浜 「わ、私もそうするよ!」

凜 「ここでするの?」

雪乃 「ええ。ここが私と彼の始まりの場所だから」

由比ヶ浜 「うん。」

凛「そう。なら私はプロデューサーと、外出てるね」

小町「小町も凛さんと外に出てますね。」

雪乃「ええお願いするわ。」

side 男

八幡「と、こんな感じですね。」

武P「お、お二人はなかなか進んでいたようですね。」

八幡「ええ、まあ。」

武P「あ、比企谷さんにはこれを渡しておきますね。」

八幡「これは?」

武P「346プロのビルに入るのに必要なカードです。いつでも見学に来て下さい、入り口でこれを見せると入ることができます。」

八幡「あ、ありがとうございます。」

フリカエラズマエユムイテソシテタクサンノエガオヲアゲル♪

八幡「もしもし。え、なに?今から部室に行くの?わかった。今?屋上。すぐ行く。」

武P「どうしました?」



八幡「凜からです。今話が終わったから戻ってきてください。」  
武P「なるほど。わかりました。戻りましょう」

八幡「今戻ったよ」

凜「あ、八幡おかえり」

雪乃「比企谷君おかえりなさい」

由比ヶ浜「ヒツキーおかえり！」

凜チラッ

雪乃・由比ヶ浜コクッ

凜「八幡。今から小町ちゃんと外出てくるから」

八幡「は？え？凜？」

凜「ほら。プロデューサーも行くよ！」

武P「え？あ、はい。」

八幡「おい、凜、行っちゃった。」

雪乃「比企谷君。話したいことがあるんだけど。」

八幡「どうした？急に。」

由比ヶ浜「まず、ヒツキーに謝らなきゃいけないね。」

雪乃「携帯の電話とか勝手に出たりしてごめんなさい。あと、あなたは気づいてないけど、この間、346プロに行った時、あなたを尾行していたの。」

八幡「!?だからか。だからわかったのか。」

由比ヶ浜「ごめんね? ヒツキー」

雪乃「ごめんなさい。比企谷君。」

八幡「話してくれたから、別に構わねーよ。話はそれだけ?」

雪乃「待つて!あと、もう少し。」

八幡「わかった。」

由比ヶ浜「あのね、さつきしぶりんから話聞いてしぶりん勝てる気がしないけど、それでもヒツキーに伝えたいことがあるの。」

雪・由「私は比企谷八幡さんのことが大好きです。私と付き合ってください!」

八幡「!?!」

八幡「マジか?」

雪乃「ええ。マジよ。」

由比ヶ浜「ヒツキー。ダメ?」

雪乃「できれば、返事ももらえるかしら。」

八幡「……………ダメだ。俺には凜がいる。でも、恋人の本物なら凜と見つけた。凜

としか見つけられない。でも、俺は何年たっても消えない絆をもつ本物の友達としてお前らといたい。それじゃダメか？」

雪乃「そうね。しつかり返事してくれてありがとう。」

由比ヶ浜「うん。ヒツキーありがとう。」

由比ヶ浜「じゃあ、ヒツキー、私のこと名前で呼んでくれる？」

雪乃「ええ。私も八幡と呼ぶから、私のこと名前で呼んでくれる？」

由比ヶ浜「私のことも名前で呼んで？」

八幡「わかった。雪乃、結衣」

雪乃「さて、今日は終わりにしましょう。比企、八幡は先に帰ってていいわよ。」

八幡「そ、そうか。じゃ、明日な、雪乃、結衣。」

結衣「うん。じゃあね。ヒツキー」

雪乃「さようなら、八幡」

結衣「ううう。ダメだったよ。ゆきのん」ナミダボロボロ

雪乃「うう。八幡」ナミダボロボロ

凜「今おわった？わかった、私雪乃さんと結衣さんに挨拶行ってくるから待ってて。」

武P「挨拶なら私も。」

凜「プロデューサーはここで待っていて。」

武P「いやしか

凜「待っていて。」

武P「わかりました。」

小町「私もいきますね。」

凜「雪乃さん。結衣さん。今日はありがとうございました。」

雪乃「あ、あら。渋谷さんじゃない。」

結衣「あ!しぶりんだ!」

凜「一応挨拶に。」

雪乃「なるほどね。」

凜「あと、あの友達になりませんか。お二人となら上手くできそうですし。」

結衣「しぶりんと?やったー!」

凜「じゃあいつでも連絡くださいね。」

雪乃「ええ。これからもよろしく。渋谷さん。」

凧「凧。」

雪乃「え？」

凧「名前でよんで？雪乃。」

雪乃「わかったわ、凧」

結衣「しぶりん、よろしくね！」

凧「八幡お待たせ！」

八幡「凧、お疲れ」

凧「じゃあ今日はここまでかな。」

八幡「そうか。」

凧「うん。じゃあね、八幡、小町、雪乃、結衣！」

八幡「おう。じゃあな。」

小町「凧さん。さよーならー！」

雪乃「さようなら。凧。」

結衣「しぶりん。じゃーねー!!」

凧「ほら。プロデューサー行こう。」

武P「はい。では皆さま失礼します。比企谷さんはいつでも見学に来てください。」

八幡「はい。」

比企谷家

夜

小町「お兄ちゃん」

八幡「どした?」

小町「ゴメンね?お兄ちゃんのことなのに、いらないうことなのに、変なことしちやつて

……本当にゴメンね?」グスグス

八幡「携帯みたり雪乃に連絡したりしたことか?」

小町「うん。お兄ちゃん働きたくないって言ったから手伝いたくて。いざとなれば小

町がお兄ちゃんのこと養うとかも考えてたんだけど余計なお世話だったね。本当にゴ

メンね?」グスグス

八幡「小町。泣かないでくれよ。俺は小町が笑ってるのが好きなんだ」

小町「本当?あんなことしたのに今まで通り接してくれる?」

八幡「当たり前だろ?」

小町「お兄ちゃん!大好き!」

八幡「そうか。俺も大好きだぞ」ナデナデ

## ポーナストラック♪ その1

## 八幡「ヤンドリの恐怖」

sideシンデレラプロジェクト

みりあ「凜ちゃんの彼氏さんって結構かっこいいよね？」

凜「!?みりあなにいつてるの?」

李衣奈「確かに!ロックな人だったよね!」

未央「フッフッフッ。しぶりんのことだからきつと携帯の中にツーショット写真が入っているはず!」

凜「な!」

杏「この反応は当たりっぽいね」

莉嘉「凜ちゃん見せてよ」

凜「な、なんで?やだよ」

智恵理「ダメですか?」ウルウル

みりあ「ダメ?」ウルウル

凜「くっ!!わかったよ!見せればいいんでしょ!」

みりあ「やった！」

凜「ホラ。」

莉嘉「うん。やっぱかつこいいよね！」

卯月「今日来るんですよね？八幡さん」

凜「うん。そう言ってたよ」

かな子「それよりこの写真の凜ちゃん、顔真つ赤だね」

アナスタシア「ダー。凜顔真つ赤つかです。でもカツコいい・・・」

美波「フフ凜ちゃんかわいいね。でもこの人本当カツコいいね、一目惚れしちゃいそうだったもんね」

未央「あれあれ、美波さんもアーニヤも顔赤いけど？」

美波「み、未央ちゃん!」

凜「美波。どういうこと？」ニツコリ

莉嘉「凜ちゃんが怖いよ」

ガチャ

志希「おはよ」

卯月「あ！おはようございます！志希さん。どうしたんですか？」

志希「いや、ちひろさんにこのスタドリの進化版作ってくれて頼まれちゃって。」



でも、ちひろさんいないみたいだね」

かな子「はい。プロデューサーとどこか行きました。打ち合わせですかね」

志希「そうだ！そのスタドリ作りすぎちゃったからみんなにあげよう！！ただし、数は5本しかないからね。じゃんけんだよ」

みく「よし、じゃんけんにゃ！」

ジャンケンポイ！

志希「勝ったのは、凜と卯月と美波とアーニヤと智恵理だね！それじゃ、このドリンクあげるね。それじゃ」

卯月「はい！ありがとうございます！」

智恵理「それじゃあ飲んでみますか？」

美波「そうだね」

ゴクツ

ガラツ

志希「それ飲んじやダメ〜！！」

かな子「あれ？志希さん？どうしたんですか？」

志希「遅かったか・・・そのドリンクはヤンドリと言って、ヤンデレになるドリンク

なんだ。間違えて持ってきてしまった。まずい、とりあえずその5人をどこかn

凜「フフフフフ八幡愛してるよ。八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡どこにいるの？早く会いたいよ。早く来てよ。八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡」

美波「凜ちゃんの彼氏さんだけど、私のものにしても問題ないよね。年上には年上の魅力が！フフフフフフフフフフ八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡早く会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい会いたい」

アナスタシア「凜の彼氏早く会ってみたいです。会ってナデナデして欲しいです。八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡八幡私を抱きしめてください」

卯月「フフツ！八幡。私があなを一目見たときからあなたは私のものですよ！だから早く来て私のこと抱きしめて、撫でてください！八幡八幡八幡八幡」

智恵理「大好きです。八幡さん。もう私八幡さんなしじゃ生きていけません。早く会いたいです………」

凜「ねえ。みんな」  
美波「なんです？」

凜「とりあえず、八幡が来たらみんなで堪能するために、拘束するよね？」

卯月「凜ちゃん。当たり前ですよ？」

凜「志希さん」



早く会いたいよ」ニタア

凜「とりあえず。プロデューサー、ちひろさんを見つけたら眠らせて、仮眠室に入れて、外側から鍵。八幡を見つけたら、この部屋に連れてきて……」。わかった？」

卯月「そうしましょう！八幡。あなたのために島村卯月頑張ります！」ニタア

~~~~~

杏「プロデューサー！大変だ！」

蘭子「た、大変です！」↑さっきの凜たちが怖すぎて標準語になってる

きらり「にはー！凜ちゃんたちが怖いよ」

武P「どうしました？」

ちひろ「杏ちゃんまで慌てて。どうしたんですか？」

杏「実は

カクカクシカジカで……」

杏たちは一瞬早く逃げたから助かったけど他のみんなは……」

ちひろ「そうだった。今日は志希ちゃんからスタドリもらう日だった」

武P「それは大変です！比企谷さんに連絡を」

八幡「あ！武内さん。こんにちは」

武P「比企谷さん！実は

カクカクシカジカ

ということなので、今日h

凜「八幡見いつけた！まずはプロデューサーたち5人を眠らせなきゃね。その後は八

幡を捕まえるよ」ニタア

武P「比企谷さん！逃げてください」

八幡「わ、わかりました」

凜「あれ？八幡逃げるの？」ニタア

八幡「当たり前だろ！」

卯月「八幡。一緒に部屋に行きましょう」ニタア

八幡「おい！島村いつから俺のこと名前で呼んでんだよ！」

卯月「私のこともなまえでよんでくださいね？」

八幡「は？何言ってるんだ？島むr

卯月「呼んでくださいね？」ニタア

八幡「う。わ、わかったよ」

凜「じゃあ他の人もみんな名前で呼んでね？八幡」ニタア

八幡「わ、わかったが、とりあえず逃げる！」

凜「八幡。逃がさないよ」ニタア

卯月「島村卯月、あなたのために頑張ります」ニタア

美波「八幡。気持ちいいことしようよ」

アナスタシア「ダー。八幡。待っててくださいよね」ニタア

李衣奈「八幡。ロツクなアイドル舐めちゃダメだよ？逃げてても無駄なんだから」ニタア

八幡「くっそ、アイドルスゲーな。めっちゃ足はえーな」

卯月「あれ？凜ちゃん追いかけていいの？」

凜「大丈夫。八幡の考えてることなら大体わかるから。とりあえず今日は帰るべきだとか考えてるから、3分12秒後に玄関に現れるよ。美波とアーニヤ行ってきて」

美波「わかったよ！凜ちゃん。八幡待っててね」ニタア

アナスタシア「ダー。八幡待っててください」ニタア

ふー。追いかけてこなくなったな。つーかアイドル身体能力高すぎ。あのまま逃げ

てたら間違いなく追いつかれてた。ま！とりあえず今日は帰るべきだな

346プロ玄関

あそこを出れば！

美波「八幡みいつけた！」

アナスタシア「ダー。流石凜です。3分12秒ぴったりです」

八幡「!!そうか。凜がいるのか」

美波「八幡。逃げるの？」

八幡「はあ。俺は諦めが悪いんだよ！諦めたらそこで試合終了だからな！」

凜「え？また逃げた。美波大丈夫だよ。次に八幡が行くのは36階の階段脇男子トイレの奥から2番目の個室だね」ニタア

みく「わかったにや。次はみくがいくにや」

李衣奈「私も行くよ。ああ早く八幡とロックなことにしたいよ」ニタア

くそツ。玄関はダメか。薬の効果が切れるのを待ったために男子トイレに行くか

346プロ36階階段脇男子トイレ

八幡「流石の凜も何階かはわからないだろ」

ガチャ

みく「八幡見つけたにや」ニタア

八幡「!?くそッ！」

李衣奈「逃がさないよ」

八幡（まずい。前には多田、後ろには前川が」

李衣奈「ねえ八幡。なんで私のこと名前で呼んでくれないの？」ハイライトオフ

みく「声漏れてたにや」ハイライトオフ

まずい！このままじゃ、即バットエンドだ！ここは仕方ない

八幡「ごめんな、李衣奈、みく」

李衣奈「！えへへ。八幡が名前で呼んでくれた。えへへへへへ」ニタア

みく「！八幡が名前で呼んでくれたにや」ニタア

こえーよ。その顔。やめて。ファンには見せれない顔になってるから。

李衣奈「これからも名前で呼んでね。呼ばないと・・・」ハイライトオフ

みく「わかったにや？」ハイライトオフ

八幡「わ、わかった。わかったよ」

李衣奈「ほら。八幡もこれから捕まるんだし、捕まったら楽になれるよ。ほら、早く行こうよ」

八幡「え？ほ……本当にここで捕まれば。ここでお前たちと一緒に凜のところに行けば、本当に楽になれるのかい？」

みく「そうだにや。だから早く一緒に来るにや！」

八幡「だが断る」

八幡「この比企谷八幡の最も好きな事のひとつは自分で強いと思ってるやつに「NO」と断ってやる事だ」

「言えたくらく。人生で一度は言ってみたい台詞Best 10には入る台詞だぜ！

みく「なんにやと!？」

李衣奈「ふーん。でもどうやってここから逃げるの？」

八幡「フツ。この比企谷八幡をなめるなよ！」

なんか今の俺ならなんでも出来る気がする！

李衣奈「か、壁を蹴って頭上をどびこえられた!？」

凜「え？壁を蹴った？流石八幡だね」

卯月「凜ちゃん。八幡は次はどこに？」

凜「うーん。．．．!!そうか。そうだよ。．．．次は駐車場の車の下に隠れるね。場所はF6の車の下。次はみんなで行こうよ」

みりあ「え？みりあも八幡お兄ちゃんとあえるの？やったー」

次は駐車場の車の下に隠れるかあそこならなんとかなるだろう

と、いつもの俺なら考えるだろう。だが、凜はこの考えを間違いなくわかってるだろう。だから、俺は裏の裏をかいて、シンデレラプロジェクトの部屋に隠れる！

346 プロシンデレラプロジェクト

ガチャ

八幡「よし。誰もいない。ここの椅子の下に隠れば」

凜「八幡見つけたよ」ニタア

八幡「!?なんで? 凜は駐車場に行ったんじや?」

凜「うん。私も騙されるところだったよ。でも、そろそろ八幡なら裏の裏をかくかなって思っただけ」

八幡「くそツ! まずい!」

凜「八幡。もう逃れられないよ八幡は将棋やチェスで言うチェックメイトにはまった

んだよ。みんな。今だよ」ニタア

八幡「う！なんか眠くなつて……」zzz

八幡「うう。どこだここ」

アーニヤ「女子寮の私の部屋ですよ。八幡」ニタア

八幡「なんで、てか動けな」

俺の手には手錠と足かせ。全く動けない。

美波「当たり前ですよ。もうあなたを逃すわけにはいかない」ニタア

卯月「ふふ。八幡。大好きです！」ダキニタア

くそ！いい匂いがするぞ！それにクソ可愛い！その顔以外は！

みりあ「八幡お兄ちゃんいい匂い」ダキ

戸塚並みの天使だ！みりあ！天使だが怖い！なんか！オーラが。

智恵理「もう。八幡さん。なしじゃ私ダメです」ニタア

もう一人戸塚並みの天使がいるがこっちも怖い！

しかも全員可愛いから仕方ない！」

李衣菜「私たちって可愛い？」

八幡「!!声に出てたか？」

莉嘉「うん！バツチリだよ八幡君！」ニタア

凜「じゃあ。八幡これ飲んで」

そう言つて凜はなんか、液体を出してくる。

八幡「いやいや。飲めるわけないよな」

凜「そう……………。。なら仕方ないね。八幡に拒否されちゃったもんね」

八幡「へ？」

凜「みんな。八幡を押さえ込んで」

凜以外「わかった！」

そう言つて凜以外のアイドルたちに抱きつかれてて動けない。

つーか匂い嗅ぐなよ！

その後凜はさっきの液体を自分の口の中に入れてこっちに近づいてくる。

つまりこれ…………あれか？

いやいやいや。いつもならいいが今はマズイ。

八幡「凜やめ ムグ！」

凜「レロレロ」

案の定凜は口移しをしてきた。

しかもなんか上手い。これを飲み込ませようとさせるやり方が上手い。

そして

ゴツクン

飲んでしまった。

凜「ふふ。これで八幡もこつち側だよ。あ、みんな手錠と足枷解いていいよ。ようこ

そ八幡」

なんか体の中が熱い。

周りのアイドルたちを襲いたくて仕方ない。

周りのアイドルたちが愛おしすぎて仕方ない。

とりあえずここから去らなければ。

このままじゃあこいつらの思う壺だ。

そう思いドアの方に行こうとするが

卯月「あれ？さっきの飲んだんですよね？とんでもない理性ですわね！」ダキ

凜「流石八幡………かな？理性の化け物だね」ギユ

未央「ならもう一本飲んでみようか！」

続く

第2章 修学旅行編

修学旅行編 その1

奉仕部

八幡「今日も暇だな」

雪乃「そうね。でも、依頼が来ないということとは、この学校としてはいいことよ」

結衣「そうだけど、やっぱ依頼が来ないつまらないよ！」

八幡「ま！このまま依頼が来なければあと少しで解散ということ。小町の待つ家へ一刻も早く帰りたい！」

雪乃「流石シスコンね、八幡」

結衣「ヒツキーそうゆうのって死亡フラグっていうんだよ！」

八幡「まあな」

雪乃「流星に來ないわよ。そんなタイミニング」

コンコン

結衣「ノックってことは」

八幡「平塚先生ではない、つまり」

雪乃「依頼ね。私が一番フラグというものをたててみたいね。どうぞガラガラ」

戸部「すみません！お願いします!!」

葉山「やあ」

雪乃「いきなりお願いしますと言われてもなんなのかわからないわ」

八幡「なるほど、つまり戸部が海老名さんに修学旅行で告白したいからその手伝いをしろと」

雪乃「端的に言えばそうゆうことね」

結衣「いいじゃん！受けてあげようよ!!」

戸部「マジっすか！ありがとうございます!」

八幡「待て由比ヶ浜。俺はこれは奉仕部の理念に反していると思うぞ」

結衣「えー。ヒツキーいいじゃん」

雪乃「でも、確かにこの依頼は奉仕部の理念には反していると思うわ」

結衣「えー！ゆきのんまで!?!」

戸部「そこをなんとか!」

葉山「ヒキタニくんと雪ノ下さん、頼む！」

結衣「ヒツキーにゆきのん受けてあげようよ」

八幡「とりあえず、この依頼を受けるかは俺たち3人で話そうと思うから、決まったらまた連絡するということはどうだ？」

雪乃「ええ。とりあえずそれでいいと思うわ」

結衣「うー。仕方ないか。ゴメンね戸部っち」

戸部「ういつす。では、お願いします！しつれいしやした！」

葉山「わかった。邪魔したね。じゃあ」

ガラガラピシヤツ

結衣「なんでヒツキーもゆきのんも戸部っちの依頼受けてあげないんだし！」

八幡「だから言つたろ。この依頼は奉仕部の理念に反するからだ」

雪乃「ええ。私も同意見よ」

結衣「どこがだし！」

八幡「この部活は自立を促すみたいな部活だぞ。告白はもはや自立を促すことではない」
「い」

結衣「うー。でも、そしたら戸部っちがかわいそうだし！」

八幡「あほ。つーかそもそも告白は誰かの助けを借りるべきではないだろう。ま！こ

れは俺の持論だが。それに海老名さんの気持ちはどうなんだよ」

雪乃「流石告白経験者の意見は違うわね。あと海老名さんの気持ちはどうかというの
は確かにそうね」

結衣「は？どうゆうこと？」

八幡「海老名さんは戸部のことどう思ってたんだよって話だよ。海老名さんが戸部に恋
愛感情がないのなら、海老名さんはみんなが見てるなか告白を断らなければならぬ。
そして、みんなに助けてもらった戸部はどう思う。それに断られた時点で、あのグル
プは崩壊すると思うぞ」

結衣「なるほど。そうゆうことか」

雪乃「とは言っても、この3人じゃ立場が違いすぎるから、それぞれの主観が入って
しまうわね」

八幡「確かに。俺と雪乃はぼっち同然だし結衣は同じグループのヤツだもんな。確
かに助けてやりたい気持ちはわからんでもないが、客観的視点を持つやつなんているの
か？結衣の友達は大メだぞ。理由は結衣と同じだが」

結衣「へ？しゆかん？きやつかなくてき？」

八幡「なんで知らないんだよ」

雪乃「あら。あなたの彼女さんがいるじゃない」

八幡「え？凜？でも確かにあいつならな・・・」

結衣「え？しぶりんに聞くの？」

雪乃「それがベストだと思うのだけれど」

八幡「仕方ないか。あいつに聞いてみる」

八幡「結論から言うと確かに奉仕部の理念に反するから手伝うまではしなくていいが、見守るくらいなら問題ないでしょ、だそうだ。ただし、さっき俺が言ったりスクの話はしとくべきだと言ってた」

結衣「わかった！」

雪乃「それが一番良さそうね」

結衣「じゃあ明日戸部っち呼ぶね！」

次の日

戸部「こんちわーっす！」

葉山「どうなったのかな？」

八幡「結論から言うと、手伝うという依頼は受けれないが、見守るといふ形での依頼なら受けるとなった」

戸部「それで充分っす！あざーす！」

八幡「待て！戸部。お前も充分わかってると思うが、振られた時のリスクだ。言い方が悪いかもしれないが、俺たちが見てる状況で振られるとかもしれないということ。あと断られたあとのあのグループの雰囲気だな。それがリスクだがそれで構わないなら受けるぞ。まあもつとも後者は俺たちは関係ないがな」

戸部「それで問題ないっす！お願いします！」

結衣「戸部っち頑張っつてね！」

葉山「ありがとう！君たちは僕たちのグループに入ってくれるということでもいいのかな？」

八幡「仕方がないがそれがかまわん」

戸部「では、修学旅行ではお願いします！」

後日346プロ

凜（八幡修学旅行10月21日〜23日って言ってたなあ。私も八幡と旅行行きたいなあ）

武P「渋谷さん。今度の仕事なのですが、テレビのレポーターとしてトライアドプリムスの3人で京都に行ってもらいます」

凜「うん」

凜（京都かあ。八幡も修学旅行で京都行くっていつてたなあ）

武P「泊りがけの仕事となるので、一応早めに連絡をしておきます」

凜「泊まり？うん、わかった。いつ？」

武P「えつとですね。10月の21日22日23日です」

凜「……………」

武P「ど、どうしました？渋谷さん？」

凜「10月21日〜23日まで京都で仕事……？」

武P「ええ。家の用事がありましたか？でしたら他の

凜「いや！違うよ!!!」ガタツ

武Pビクッ

武P「どうされました？」

凜「プロデューサーちよつと待ってて」

武P 「は、はあ」

凜 プルプル ア、モシモシ？ ハチマン？

~~~~~

武P 「あ、どうされました。渋谷さん」

凜 「泊まるどこってどこ？」

武P 「は、はあ。ホテルとなりますが、それがどうかされましたか」

凜 「京都の〇〇ってどこじゃダメ？」

武P 「構いませんが、どうかされましたでしょうか」

凜 「ま、まあね。加蓮と奈緒には言っているの？」

武P 「はい。既に伝えてあります。3人で同じ部屋でよろしいですよ？

凜 「うん。プロデューサーも来るの」

武P 「ええ。おそらく隣の部屋になるかと。では、予約を取ってまいりますので」

~~~~~

武P 「予約を取って来ました。しかし、なるほどそうゆうことでしたか」

凜 「バレちゃった？」

武P 「比企谷さんでしたか」

凜「う、うん」

武P「一応アイドルということはホテルの方に伝えておきましたので。あのお二人には」

凜「うん。話すつもり。そろそろ加蓮と奈緒にも話しておかなきゃなって思ってた」

武P「なるほど。分かりました。しかし、向こうではばれないようにお願いしますよ」

凜「うん！」

凜（八幡！ビックリさせてあげる！）

side 総武高校

修学旅行1日目

八幡（戸部は海老名さんに頑張ってる近づこうとしていることはこっちからもわかる。おそらく海老名さんも気づいているのだろう。露骨にはないが、さりげなく距離を置いている）

結衣「ヒツキー。戸部っち頑張ってるんだけどね」

八幡「おそらく海老名さんは戸部のやつに気づいてんだろ。だからなんかやな予感しかしない」

夜

葉山「翔このまま頑張れ！」

戸部「そうっしょ！まだまだこれからっしょ」

八幡（ま！無理だと思いがな。はあ、やだなあいやな予感しかしない！小町か凜助けて〜）

プルルル

彩加「ホテルの電話だねどうしたんだろう」

葉山「はい。モシモシ。比企谷さん？はいわかりました。ヒキタニくん、フロントからでなんか電話が変わってくれだそうだ」

八幡「はい。お電話変わりました。比企谷です」

従業員『お客様から比企谷さんを呼んで欲しいとご連絡がありましたので、1266号室までお越しください』

八幡「は、はあ。わかりました」

従業員『では、失礼します』

ガチャ

彩加「どうしたの？」

八幡 「いや、なんか部屋に来て欲しい人がいるらしいから行ってくる」

彩加 「なんでフロントどうしたんだらうね？」

八幡 「だよな」

彩加 「まあいつか！八幡いってらっしゃい！！」ニッコリ

八幡 「可愛い！！小町並みの可愛さ凛には劣るけど」

八幡 「お、おう。行ってくるな」

ホテルロビー

八幡 (でも、1266号室ってうちの高校じゃない。誰だ?)

結衣 「あ、ヒツキー！どうしたの？部屋から出たくなさそうなのに」

雪乃 「あら八幡。どうしたの？」

八幡 「いや、なんか部屋に来てくれって呼び出されて」

雪乃 「八幡を呼び出すなんて誰かしらね。戸塚君は同室だし」

八幡 「そうなんだよな」

結衣 「部屋はどこなの？」

八幡 「1266号室だって」

雪乃 「？1266号室ってうちの高校ではないわね」

結衣「うーん。ますます怪しいね。私とゆきのんも行っていい？」

八幡「いや、誰かわからないから危ないからやめとけ」

雪乃「危ないからこそ行かせられるわけないじゃない」

結衣「そうだよ！やだって言ってもついていくよ！」

八幡「はあ。わかった。でも、危なくなったらすぐ逃げろよ」

結衣「うん」

雪乃「ええ」

1266号室前

八幡「ここか」

雪乃「鍵はかかってないようね」

結衣「入る？」

八幡「入るだろ。俺がまず入るから、合図したら来い」

雪乃「わかったわ」

八幡「じゃあ行ってくる」

ガチャ

八幡「なんだ、誰もいん

??? 「八幡!!」ギョツ

八幡「!？」

八幡（なんだ？な、名前で呼ばれた!?ん？この声）

八幡「なんで凧がいるんだ？お前仕事は？」

凧「仕事で京都きたのトライアドプリムスで」

加蓮「ふーん。あんたが凧の・・・」

奈緒「目以外はいいね」

凧「奈緒？」ニツコリ

奈緒「いやいや！見た目の話しね！だから凧おこんないで！怖いよ！」ガクブル

加蓮「うん。人の中を見てくれそうだな目だね」

八幡「いや仕事で来たからってなんでここに・・・って、だからあの時ホテルの名前

聞いてきたのか」

凧「うん。そうだよ」

結衣「ヒツキー大丈夫？ってしぶりんじゃん！」

雪乃「あら。凧じゃない。どうしてここに？」

八幡「仕事で京都までトライアドプリムスの3人で来てるんだと」

結衣「へー。でもなんでこのホテル？」

八幡「結衣。その下りはさつきやったぞ」

結衣「ほえ？」

加蓮「凜この2人は？」

凜「八幡の同じ部活の子」

奈緒「2人とも可愛いな」

結衣「よろしく！」

雪乃「よろしく」

凜「で、告白の方は？」

八幡「えつとだな・・」

カクカクシカジカ

でかなりヤバイ」

凜「うーん。でもリスクの話はしてたから仕方のないことかもね」

奈緒「だいたいリスクなしで告白する方がありえないだろ」

加蓮「うーん。それでも告白するんなら明日あたり？」

八幡「そうだろうな。やな予感が当たらなけりやいいんだが・・」

凜「そうだね」

加蓮「そうだ！八幡君！なんかちひろさんからドリンク預k

八幡「そんで、薬の効果か切れるまで男子トイレで隠れようと思ってドア開けたら既にアイドルが中にいるんだぞ」

結衣「それは」

雪乃「怖いわね。でもなぜ？」

凛「あの時の私は八幡の考えてること手に取るようにわかったんだよね」

八幡「本当怖かった」

結衣「ひ、ヒッキードンマイ」

雪乃「大変だったわね」

修学旅行編

その2

side 凜

八幡から聞くと(メールだけど)2日目も脈なしらしい。はあ、嫌な予感がする。八幡に火の粉が降らなきゃいいけど……………

て、あれ?八幡?あの葉山とかいうやつと外出するみたい。

その時、一瞬八幡と目があう。私は変装しているが、向こうは私だと気付いたようだ。しかし、問題は八幡の目だ。なにか私には言えないような。そうなこと考えてる目だ。あの葉山とかいうやつは奉仕部にこの告白の依頼をした人らしいから、その依頼の関係だろうか。

私は真相を知るべきだと、あとをつけていく。あの依頼に関係しているのならば、八幡に聞いたところで、はぐらかされるかもしれない。そう考え雪乃と結衣を部屋に呼び出す。同時に奈緒と加蓮に事情を説明して、外に出る。

~~~~~

side 凜

どこまでいくのかな?



そんなことを考えていると、あるとりわけ人が通らなそうな場所で2人は止まった。そして何か話し始めたみたい。ちようと隠れられるような茂みがあったのでそこに身を隠して、全部ではないが途切れ途切れの会話を聞く。

葉山「・・・たのむ・・・。やり方・・・最後の・・・。たのむ・・・。」

八幡「アホか。なんで・・・断ったんだよ。受けれ・・・。」

葉山「確かに・・・は奉仕部の理念・・・から聞いた。しかしこれは僕たちのグループ・・・。」

八幡「それはそっちの・・・。」

葉山「でも、・・・からも聞いているのだろう?・・・は君・・・で  
きないから、このグループ・・・の自立・・・。」

八幡「……………。受けてやる。これは……………として受けるからな」

葉山「あとこの件は……………から……………に伝わりかねないから」

八幡「うつせーな。わかったよ」

葉山「ありがとう。助かる。それじゃあ」

話は終わったみたいだ。先に葉山とかいうやつが走り去っていった。もちろん私は気づかない。さて、八幡もこっちに来る。ここで私は茂みから飛び出る。

凜「さて、八幡何してたのかな？」

八幡「り、凜……！なぜここに？」

この時八幡の目を正面から見て確信した。八幡は私に何も話さず、私には言えないようなことをやろうとすることに。

さて、八幡。何しようとしているのかわからないけど、

おし おきかな？

凜「八幡。私の部屋いこつか？」ニコニコ

八幡「いや、でもこれから凜「早く来て」ギロツニコニコ

八幡「はい」

時間もないみたいだし急がなきゃ！

??? (くくく。やつぱり姫菜から言つといてもらつて、助かった。あのままじゃ、依頼を受けてもらえなかつたからな。確かに翔が告白しても、メリットはある。でも、これは相手がどう思ってるかわからない場合だ。今回は結果が見えてる。これでは翔はフラレ姫菜と翔は今後ぎこちなくなり、グループは崩壊する。そして姫菜はあのグループが気に入ってるから壊したくない。ここまで言えばあいつはこの依頼を受けざるを得ない。そして翔が告白するまで時間がない。これであいつはおそらく嘘告白をするだ

ろう。そうすれば、奉仕部の2人からは見放される。そうすればあいつに脅されている雪乃ちゃんと結衣は解放される。そして、やっと雪乃ちゃんは僕のものとなる。やっと雪乃ちゃんは本来いるべき場所に戻る)

??? 「待つてくれ。雪乃ちゃん。君をあいつから君を救つてあげる」

八幡 「なんで、お前らがここにいるんだ?」

結衣 「私はしづりに呼ばれてここにきたよ」

雪乃 「私も凜に呼ばれてここに」

奈緒 「凜。私たち外出てようか?」

加蓮 「私と奈緒は状況あまりわからないから」

凜 「いや2人ともいて?意見が多いに越したことはないから」

八幡 「は?凜。何言つて凜「正座」はい」

雪乃 「で、凜どうしたの?」

凜 「実はさつき、八幡があつた葉山?とかいうやつと外の人目につかないようなところで、話してたんだよ。ちやうど行く前の八幡と目があつてね?それで、嫌な予感がしてついでに行つたら話し始めてさ」

結衣 「それで?」

凧「会話は途切れ途切れでしか聞けなかったんだけど、その中から八幡だけが依頼を受けるような話をして、話が終わった後に八幡の前に出て目をみたら私に言えないようなことをやろうとしてるって思ったから、ここまで連れてきたの」

奈緒「いやいや、なんで目見ただけで何考えてるかわかんだよ」

結衣「へえ。ヒッキー何考えてたのかな？」ハイライトオフ

雪乃「凧のいうの通り、話し合いが必要みたいね」ハイライトオフ

凧「さあ。早く話してよ。八幡」ハイライトオフ

加蓮「3人の目から光が消えてるよお。怖いよお！」

八幡「いや、でも」

凧「ダメ？八幡。私たちじゃダメ？」ウルウル

奈緒「うお！ヤンデレ凧からデレデレ凧が来た！これが卯月が言ってたデレ凧か。と

んでもない破壊力だ」

八幡「……………」。はあ。わかった。話す」

凧「ありがとう！八幡!!」ギユ

八幡「悪かったな凧」ギユ

結衣「話してよヒッキー」

雪乃「そ、そうよ。早く話して」

八幡「時間がない。話を要約すると、葉山からの依頼は戸部の告白の阻止。実は前にも海老名さんから同じ依頼を受けてたんだ。その時は断ったが。できつき、葉山から同じ依頼を受けた」

結衣「じゃあなんで？」

雪乃「結衣。八幡続きを」

八幡「俺も最初は断った。戸部の時と同じ理由でな。だが、戸部の時はまだ海老名さんが戸部のことをどう思ってるか知らない。つまりメリットがある。しかし、海老名さんが断るとわかっていながら、告白するとどうなることが予想される。まず間違いない、戸部と海老名さんの仲はギクシヤクする。そして、あのグループの空気もギクシヤクするだろう。海老名さんはあのグループを気に入ってるから、壊すわけにはいかない、とそう言ってきた。もちろん葉山もだが。それで仕方なく俺は依頼を受けた」

凛「……………八幡はどうするつもりだったの？」

八幡「……………嘘の……………告白を……………するつもりだった。すまない。申し訳ない」

凛「そつか。私は八幡にとって、そこまで重要じゃなかったってことなの？」

八幡「違う!!絶対にそんなことはない」

凛「……………そつか。よかった」

八幡「許してくれるのか？」

凜「今の八幡の目をみたら大丈夫」ニコ

凜「けど、その葉山とかいうやつは許せないけどね」ゴゴゴゴゴゴ

結衣「ヒツキー。私たちじゃ頼りない？」

雪乃「私たちではダメかしら？」

八幡「違う。そんなことはない」

結衣「じゃあ、次からはこんなことしない？」

八幡「ああ」

雪乃「八幡。約束よ」

八幡「わかった」

凜「じゃあ、みんなでこの件の解決策を話し合おうか。6人もいるんだしね」

八幡「そうだな！」

結衣「うん！」

雪乃「もちろんよ」

奈緒「話聞いているだけで、その葉山ってやつにイライラしてくるよ！」

加蓮「そうだね。頑張ろう！私たちを敵に回したことを後悔させてやる！」

## 修学旅行編 その3

凜「じゃあ、どうするか考えよう」

加蓮「まずなんで、その葉山ってやつはこんな面倒くさい手段とつたんだろうね」

雪乃「……………彼はおそらく私と結衣が八幡に失望するように仕向けたのではないかしら。そして、おそらく彼は私のことが好きなんでしょう。まあ、そんなのまっぴらごめんだけど。それで私が八幡に失望したところを助けるというのが彼の作戦なのでしょう。もつとも、すでに作戦は終わってるけどね」

結衣「え？なんでヒツキーにしつぼう？するの」

奈緒「結衣。なんで失望もわからないんだ……………」

八幡「それはもともとだ。結衣、考えてみる。もし、俺がさつき言ったことをやってたら、お前たちはどう感じる？」

結衣「うーん。もつと私たちの気持ち考えてよつて思っちゃうな。あ！そーゆーことか！」

雪乃「やつとわかったかしら」

凜「よし。これであいつの目的はわかったと。で、これでどうやってあいつを吊るし

上げるか」

結衣「あのさ。この修学旅行中にやるとき、なにも悪くない戸部つちとか姫菜とか優美子とか巻き込んだじゃうと流石にかわいそうだから。学校戻つてからじゃダメかな？」

八幡「確かに、それがベストだな」

加蓮「話を聞いてるとそのグループのリーダーがその葉山とかいうやつなんでしょ？」

雪乃「ええ。そうね」

奈緒「だったらそのグループの子たちが、かわいそうだな。そんなクズみたいな裏の顔があるだなんて」

凜「……………どうしようか」

八幡「凜。わかってるんだろ？」

凜「……………うん。わかってるよ。でもこれは……………やって欲しくない」

雪乃「……………そうね」

八幡「いや。やるしかない」

結衣「なんで、ヒッキーは悪くないのに」

八幡「あいつを吊るし上げるには、こうするしかない」



凜「……………私たちの気持ちはどうなるの？」

八幡「……………俺が償いをする。なんでもする。こうするしか葉山を吊るせない。戸部たちを救ってやれない」

凜「……………わかったよ。仕方ないね。償いは何してくれるの？」

八幡「一週間何でもしてやる。お前のそばにいてやる。それじゃダメか？」

凜「仕方ないね。それでいいよ」

奈緒「凜。いいのか？」

凜「うん。まずはあの唇をボコボコにしないと。私の八幡をはめようとしたんだからね」ニコ

加蓮（凜。目が笑ってないよ。こっちまで震えてくるよ）

雪乃「凜がそう言うなら私たちは何も言えないわよ」

結衣「そうだね」

八幡「……………悪いな」

凜「それは言っちゃいけないよ。もう決めたんだから。私も悪いんだよ！」

八幡「そうか。じゃあ凜はどうする？そこまで来るか？」

凜「うん。隠れて見てる」

八幡「結衣と雪乃はしっかり俺を突き放すふりをしろよ」

雪乃「フフ。誰に言ってるのよ」

結衣「わかってるよ！」「もつと私たちのこと考えてよ！」「とか言えばいいんでしょ？」

八幡「そうだな」

奈緒「終わったらここ戻ってくるのか？」

凜「来てよ。この後のことも話さなきゃ」

八幡「そろそろ時間もやばい。行くぞ」

side 葉山

そろそろヒキタニも終わりだ。

お、あいつと雪乃ちゃんと結衣も来たみたいだな。

戸部「俺と付き合『八幡「ずっと前から好きでした。俺と付き合ってください』

海老名「ごめん。今は誰とも付き合うつもりもないんだ」

フツフツ。これでヒキタニも終わりだ。

葉山「なんで、こんなやり方しかできない君に頼らなければならなかったんだ」  
こんなことを言っておけばいいだろう。

雪乃「あなたのやり方嫌いだよ」

結衣「もつと私たちのこと考えてよ」

クククククク。計画通りだ。これであいつも終わりだ。

~~~~~

凜「完璧だったね。私あの屑のことずっと見てたけど、戻ってく時一瞬笑ったんだよね。私以外気付かなかったと思うけどね」

雪乃「では、あの屑を吊るし上げる方法を考えましょうか」

結衣「戸部つちと姫菜には悪いけど、2人とも話さなきやダメだよね」

奈緒「場所はどうすんだ？誰かしらいるだろ？」

加蓮「あ！隣のプロデューサーのところは？」

凜「そうだね」

八幡「じゃあ結衣は葉山以外の関係者を隣の部屋に呼び出してくれ」

三浦「結衣。なんだし」

海老名「結衣どうしたの？」

結衣「戸部つちが来る前に話さなきゃね」

海老名「戸部つち？どうゆうこと？」

雪乃「三浦さん。実は

カクカクシカジカ

というわけで集まってもらったのよ」

三浦「嘘だし！隼人がそんなことするわけないし！」

???「ごめんね。三浦さん、だっけ？私もそこにいたから、本当だよそれは」

三浦「え？渋谷凜!?!どうして？」

凜「実は仕事でここに来ててさ。部活でお世話になったから雪乃と結衣と一緒にいた

ら、そうなったの。私人を見る目はあるからね。自信あるよ」

姫菜「優美子。多分それ本当だよ」

三浦「え？ 姫菜まで、なんでだし！」

姫菜「私がヒキタニ君に依頼したの隼人君に勧められたからなんだ。戸部つちのことも隼人君がやってたから、こうなることは予想できたはずなのにギリギリまで自分で動かないで、最後にヒキタニ君に頼んだ。これはもうそう考えてると思うしかないよね」

三浦「そっか。私は隼人にとつてその程度だったんだ。……………絶対ボコボコにしてやる」ゴゴゴゴゴゴゴゴ

結衣「それでこれを戸部つちにも話さなきゃならないから、姫菜のことも……………」

海老名「仕方ないね。でも隼人君がいなくなったらそれでも対等な関係でいられると思うから」

三浦「で、いつやるんだし」

凜「しばらくは泳がせるよ。いい気にさせることでボロ出すかもしれないしね。私のスケジュールがあつたら連絡するから」

三浦「そうゆうこと。で、どうやるんだし」

雪乃「まず、私と結衣が話すわ。それで彼が計画通りではないとうろたえ始めたら入ってきてもらえるかしら。そこでボコボコにするわ」ニコ

結衣「うん」ニコ

三浦「そうだね。にしてもヒキオは優しいやつだね。それに比べて隼人は……………」ニコ

海老名「うーん。これはもう私も限界だね」ニコ

凜「もうすぐ。処刑の時間だよ」ニコ

隅にいる八幡（全員目が笑ってねー。なんだよここ。カオス？つーかももう処刑って言っちゃったしね）

修学旅行編 その4

side 葉山

フツフツフツ修学旅行が終わりもうスグ一週間。見てる限り、ヒキタニと奉仕部は崩壊寸前だな！もうスグ雪乃ちゃんは僕のものに。

ピピッ

おっとメールだ。!!雪乃ちゃんからメールだ。

雪乃『話したいことがあるので、今日の放課後奉仕部の部室に来てください』
クツクツクツ。やつと。やつと雪乃ちゃんが僕のものになるんだ！

放課後

おっとヒキタニは今日は帰るみたいだな。結衣も優美子と姫菜と遊びに行くみたいだ。待っててね雪乃ちゃん。あと少しだ。

side 奉仕部部室

雪乃「はあ。あんな屑にこんなメールを送らなくちゃならないなんて。屈辱だわ」

凜「雪乃。お疲れ様」

雪乃「八幡も結衣たちも一回帰ると見せかけるのよね？」

凜「うん。じゃあそろそろ隣の教室に待機してるね」

雪乃「ええ。では」

凜「うん。頑張ってるね」

放課後

コンコン

葉山「失礼するよ」

雪乃「来てくれたのね。葉山君」

葉山「で、話ってなんだい？」

雪乃「まあ、まず紙コップだけれど紅茶でも飲まないかしら？」

葉山「え？あ、ありがとう。いただくよ」

雪乃「では、話したいことなのだけれど……いいかしら」

葉山「うん。いつでもいいよ」

雪乃「話したいことというのは………」

修学旅行のことについてゆっくり話し会いたくてね」

葉山「しゅ、修学旅行？なんで、今更？それよりなにを？」

雪乃「フフ。動揺を隠せてないようね。具体的に言えば、八幡のことかしら？」

葉山「な、なにを！」

雪乃「八幡でそんなに動揺するなんてバカじゃないの？」

葉山「くっ、言わせておけば」ガシ

雪乃「フフ焦ったらスグ暴力？やっぱりバカなのね。そろそろ入ってきていいわよ」

ガラ

葉山「!?結衣に優美子に姫菜に翔に渋谷凧!?どうゆうことだ？なんで、渋谷凧がいる!?」

凧「別にそっちが修学旅行してた時にちょうど仕事でそっちにいただけだよ。そした

らこの間お世話になった奉仕部の皆さんがいたからね。いろいろと協力してあげただけ」

優美子「隼人。もう諦めろし。さっきの行動はこのビデオで撮ってあるし」

凜「じゃあ喋ってもらおうかな？修学旅行で八幡にしようとしたこと」ギロツ

雪乃（凜の目が怖い………あんな目で見られたら誰だつて答えちゃうわ。流石アイドルね）

隼人「そ、それは。雪乃ちゃんを僕のものにするためだ」

隼人「!?なんで口が勝手に？」

結衣「隼人君。もうそう言う演技いらさないからさ。こっちの質問に答えてよ」

戸部「俺は隼人君にとつてそんな程度のやつだったのか？」

葉山「ああ。そうだよ。お前なんか友達だと思つたことはない。今回俺の駒として動けたことを誇りに思つて欲しいくらいだったが、こんな簡単な役もできないとは無能な男だったな」

葉山「クツ!?どうゆうことだ？さっきから口が勝手に」

海老名「じゃあ次は私ね。私は隼人君にとつて駒でしか過ぎなかったの？」

葉山「ああ。だがお前も俺の駒にもなれなかつたアホだがな」

葉山「どうゆうことだ？」

三浦「あーしは隼人にとってなんだったの？」

葉山「たあの女避けとして使わせてもらったさ。悪いとは思わないぜ。お前みたいなやつを使つてやったんだから逆に感謝して欲しいくらいだぜ」

葉山「だからなんで？クソ！」

凜「じゃあ最後は私かな？なんで八幡をはめようと思つたの？」

葉山「そんなあの屑が雪乃ちゃんを脅してるから、あの屑で引きこもりみたいなのにつにふさわしい場所に戻してやろうと思つただけさ。それに雪乃ちゃんを助けないといけないしね」

葉山「クソ！なんでさつきから口が勝手に」

結衣「ゆきのん。そろそろネタばらししていいじゃない？」

雪乃「そうね。あなたがさつき飲んだ紅茶には346プロのアイドル。一ノ瀬志希さんが作つた自白ドリンクが入つたの。そして……………」

八幡「今さつきまでの会話もビデオに撮つてあるし、すでに全校放送されている。お前は終わりだ」

葉山「ヒキタニめ。お前の屑みたいなお前のせいで!!」

八幡「お前ほんと頭に血が上つたら殴りかかってくるくのな」

ガシ

陽乃「隼人。安心して屑はあんただよ」

葉山「は、陽乃さん」

結衣「もう近づかないでください。『葉山君』」

三浦「そうだし。『葉山』屑はあんただし」

戸部「『葉山君』もう二度と関わらないでください」

海老名「そろそろ気づきなよ。『葉山君』もう君は終わりなんだよ」

雪乃「姉さんの言う通り屑はあなたよ。そしてさようなら二度と近づかないで」

凛「あなたみたいなのやつはもう八幡たちに関わらないで」

八幡「葉山。お前はもう終わりだよ」

葉山「く、くそー！ヒキタニめ！」

陽乃「うるさい。行くよ」

雪乃「姉さん。ごめんなさい。そんなゴミの後片付け頼んでしまつて」

陽乃「いいの、いいの。雪乃ちゃん。比企谷君は優秀な人材だしね。こんな屑にボロ

ボロにされちゃあお姉さんやだからね」

八幡「雪ノ下さん。お願いします」

陽乃「うん。じゃあね」

~~~~~

雪乃「では帰りましょうか」

三浦「あの、雪ノ下さん！」

雪乃「三浦さん何かしら」

三浦「これからも時々ここに来てもいい？」

雪乃「今のあなたなら大歓迎よ」

三浦「ありがとうだし！」

凧「八幡、皆さん。じゃあ私はこれで」

雪乃「凧。さようなら」

結衣「しぶりん。じゃーねー！」

八幡「凧。またな」

凧「八幡。じゃあまた今度」

八幡（後の話によると、葉山はあの後高校を退学。葉山家は雪ノ下家との関係を切られたそうだ。そして、葉山家の信用は地の底に落ちたらしい）

## ♪ボーナストラック♪ その2

### 番外編 その2 職場体験

side 八幡

今は5月もう3年になった

葉山が消えてから、変わったことがある。

まず、一色が奉仕部に入った。一色はクラスの嫌がらせで無理やり生徒会長に立候補させられたらしい。それをどうにかして欲しいという依頼が来た。俺たちはそれを違う人に生徒会長をもらうという形で依頼を完遂した。

二つ目三浦と海老名さんがこの部室によく来るようになった。とまあこれくらいか。それで俺は今平塚先生に呼び出されている。

平塚「比企谷。なぜお前は職場体験希望表に一つしか書かない？」

八幡「いや、知り合いがここにいて大学に卒業したらここに来てくれって言われて。もう既に何回か行ってますし。俺と雪乃と結衣で行きたいなあって」

平塚「まあ、確かに専業主夫からは卒業したということか。まあいい、私もそう報告

しとくとしよう」

八幡「平塚先生ありがとうございます。じゃあ」

~~~~~

奉仕部

結衣「あ！ヒッキーどうだった？」

八幡「専業主夫からは成長したからって認めてもらった。嬉しいような嬉しくないよ
うな」

雪乃「ふふ。でもこれで346プロに行けるからいいじゃない？」

八幡「そうだな」

~~~~~

side シンデレラプロジェクト

武P「みなさんにはあまり関係がないのですが（真っ赤な大嘘）明後日ある高校が職  
場体験ということで、

ここに来ますので一応報告しておきます」

未央「すごいね。ほとんどがレッスンだけの日だよ」

みりあ「職場体験？」

卯月「みりあちゃん。職場体験はお仕事を体験するためのもの？ですよ」

凜「卯月。それほとんど説明になってないよ」

みりあ「え？お仕事を見に行くの？」

卯月「うーん。多分そんな感じですよ」

美波「でも、ここの事務所ってあまりそうゆうの受けないんじゃないかなかったです？」

武P「はい。今回は特例です」

アナスタシア「特別。ですか。誰なんでしょう？」

武P「それは明後日のお楽しみです」

杏「プロデューサーがそんなこと言うなんて珍しいね」

凜「確かにね」

2日後

結衣「ほら、ヒツキー早く行こうよ」

八幡「お前と雪乃は正面玄関でパスもらわねーと入れねーんだよ」

雪乃「結衣、落ち着いて」

受付「あ、比企谷さん。こんにちは」

比企谷「こんにちは。今日は職場体験で2人いるのでパス2人分欲しいのですが」

受付「あ、わかりました。ではこちらに名前を」



八幡「雪乃と結衣。ここに名前書いて」

結衣「りよーかい」

雪乃「わかつたわ」

八幡「じゃあ行くか」

~~~~~

結衣「ヒツキー慣れすぎじゃない？」

八幡「いや、別に少なくとも2週間に一回は来てるからな」

雪乃「え？どうして？」

八幡「ん？言つてなかったか？俺大学卒業したらここで働くんだよ。あ、言いふらす

なよ。面倒くせーから」

結衣「え!?! 本当？」

雪乃「そうね。あなたならいいプロデューサーになれる気がするわ」

八幡「雪乃が罵倒してこないなんて何があつたんだ？」

雪乃「酷いわね。私だってそれぐらいするわよ」シユン

八幡「悪かった、悪かった。と、ここだここ」

ガチャ

八幡「失礼します」

アナスタシア「？八幡？ですか？」

美波「今日は平日だよ？」

武P「今日は比企谷さんたちに職場体験という名目で来ていただきました。まあ、比企谷さんはいつも通りですが」

美波「八幡君？後ろの2人は？ハッ、まさか浮気？」

八幡「いやいや、美波さん。ただの部活仲間ですよ」

美波「八幡君。敬語はダメ」ニコ

八幡「すみま…………ごめん」汗ダラダラ

結衣「新田美波さんとアナスタシアさん！すごい…………こんな大スターと会えるなんて…………それよりヒツキー普通に話してるし」

雪乃「それに八幡が名前で呼んでるわ」

結衣「ヒツキー！なんで名前で呼んでるの？ヒツキー名前で呼ばなそうじゃん」

美波「そ、それは……………」

八幡「……………ヤンドリ……………ハイライト……………監禁……………」

結衣「あ、ヒツキー…………ごめんね？」

雪乃「なるほどね」

凜「あれ？八幡！やっぱりか。予想通りだね」

凜（これでアレを用意した甲斐があったよ）

美波「え？凜ちゃんわかってたの？」

凜「八幡のことになるとなんとなくね。で、なんで八幡はそんなことに？」

結衣「いや、ヒッキーがなんで新田さんのこと名前で呼んでるのか聞いたら」

凜「ああ。そうゆうこと。よしよし、八幡。大丈夫だよ」ナデナデ

八幡「ん？あ、凜か」

雪乃「よかった。戻ってくれた」

八幡「そいえば今日は……………ほとんど全員レッスンだけの日だから……………なん

でこんな日に……………」

みく「あ！八幡にや！」

李衣菜「なに？凜……………あ、八幡たちが職場体験するの。ロックだね」

卯月「八幡君！こんにちは」

八幡「多過ぎない？一応俺職場体験ということまで来てるんだけど」

未央「まあ、いいじゃんいいじゃん！いつも通りでさ！」

結衣「ヒッキーが普通に対応してる……………」

雪乃「私たちは何をすればいいのかしら？」

八幡「ん？わからん。武内さんに聞いてくれ」

武P「あの比企谷さん。今神崎さんの仕事でトラブルがあり撮影に影響があるのとこのなので、私はそちらの方に行かなければならないのですが……………」

八幡「あ、了解です」

凜（お、プロデューサーが蘭子のところに行く！ちひろさんも今日は風邪でお休みらしいからね。最近美波とかが八幡に興味持つてるといふかももう完全に異性として好意を抱いてるからね。誰が八幡の彼女かを思い知らせてあげる!!）

凜「みんな飲み物いる？」

八幡「おう。頼む」

凜（今日仕事でいないのは、デコレーション。蘭子、杏の5人。だからこの場にいるのは私、卯月、未央、美波、アーニヤ、智恵理、かなこ、李衣菜、みく、そして雪乃と結衣と八幡。私以外のコップ11個にずいぶん前に屑に使った自白剤を一滴。これで私が質問すれば終わり）

凜「はい、みんな」

凜（みんな……………飲んだね。私も一応飲んでツと）

凜「そういえば美波って八幡の事どう思ってるの？好きとか嫌いとか」

美波「えええええ!!凜ちゃん？ええとね、八幡はカッコよくて一目惚れしちゃったかな？だから、好きだよ」

凜以外「……………」

美波「わ、私何言ってるの!？」

雪乃「八幡、どうゆうことかしら？」

結衣「ヒツキー。どうゆうこと？」

八幡「凜。説明」

凜「これは志希からもらった自白剤をさっきの飲み物に入れたからね」

卯月「凜ちゃんなんでそんなことを……」

凜「あれ!!なんで私まで、本当のことを!？」

八幡「凜。甘いよ。俺をそれで出し抜けるわけないだろう。お前が俺の考えをわかるように俺もお前の考えもわかるんだ。お前と俺のコップを飲む前に入れ替えさせてもらった」

凜「しまった!!」

未央「この2人の感覚がすぎるんだけど……………」

美波「お互いの考えてることがほとんどわかるの？」

アーニヤ（凜も八幡もスゴイですね）

八幡「まあ、俺はいつもの部屋で仕事するから女子だけで本音で話しといてくれ」
~~~~~

凜「八幡もああ言ってるし話す？」

卯月「凜ちゃん？なんでこんなことしたのかな？」ニツコリ

凜「い、いや。みんなの気持ちを知りたくて……………」

結衣「しぶりん酷い」

雪乃「ふふ。結衣、凜も飲んだことだしおあいこでいいじゃない？」

未央「何話すの？」

みく「じゃあ、八幡のこと好きな人!!」

凜「ノノ」

卯月「ノ」

未央「ノ」

美波「ノ」

アーニヤ「ノ」

智恵理「ノ」

かな子「ノ」

李衣菜「ノ」

結衣「ノ」

雪乃「ノ」

みく「あれ？みんな？」

卯月「みくちゃんはどうなんですか？」

みく「もちろん大好きにゃ！」

凛「はあ。みく。聞き方が悪いんだよ。八幡のこと異性として好きな人は？」

卯月「ノ」

美波「ノ」

アーニヤ「ノ」

李衣菜「ノ」

みく「ノ」

雪乃「ノ」

結衣「ノ」

未央「私は友達として好きだよ」

智恵理「私はお兄さんみたいなところがいいなあ」

かな子「八幡さんはいい人ですから」

雪乃「あの男ここでも……………」

結衣「ヒッキーフラグ立てすぎ。しかも相手がアイドルって……………」

卯月「八幡さん。向こうでも？」

雪乃「ええ。すでに私たち以外に2、3人ほどね」

みく「にやー！八幡君の女たらし」

凜「まあ、誰にも八幡は渡さないよ!!」

美波「凜ちゃんこれで諦めると思ってるんですか？」ニコ

アーニヤ「八幡のこと。諦めませんか？」ニコ

李衣菜「私は八幡とならロックに生きれると思うんだよね。ここは負けられないよ

！」ニコ

みく「ふん！みくも負けられないにや！」ニコ

雪乃「凜の次に会った女として負けるわけにはいかないわ」ニコ

結衣「ヒッキーのことなんか諦められるわけないよ！」ニコ

未央「みんな目が笑ってないよ！」

かな子「怖いです！智恵理ちゃん。八幡さん呼んできて！」

智恵理「了解です!!」

未央「うわ！みんなの目からビームが！光線が!!みんな怖いよ！」



八幡「お前らそろそろレッスンだろ？」

凜「あ。本当だ。八幡行ってくるね」

美波「私も行つてきます！」

八幡「あ、結衣と雪乃もレッスン見学させてもらえるってさ。俺はまだやることあるから、終わり次第行くわ」

結衣「え、いいの？ やったー!!」

雪乃「わかったわ。それにしても八幡が仕事をしつかりしてるなんて………なんで専業主夫なんて言つてたのかしら」

結衣「ほら！ ゆきのん！ 早く行こうよ！」